

二十四輩順拜圖會

後篇

常陸

三

八波  
1810  
10-8



八波  
1810  
卷10-8

梅屋清

金屋本  
金屋本  
金屋本

親聖人 御舊蹟 二十四章順拜圖會後篇卷之三

目錄

○常陸之部

- 外森山唯信寺 かみしんえいしん
- 廣林山真佛寺 ひろばやしんまふつ
- 横川 よこがわ ね女の坊
- 廣瀨神社 ひろせ
- 竹舟極樂寺 たけふね
- 刑部寺 けいぶ 妻成佛の坊
- 純家 じゆんけ
- 園君の地知信上人塚 おんきみ
- 地信上人樹生坊 ぢしん
- 小壺山阿弥陀寺 こつぼ
- 聖若 せいじやく 依て聖人塚
- 妻を害して居間を織ふ中末 つまをわざはひしてゐまをおりふなかつま
- 徳池山信願寺 とくいけ
- 長瀨森八が宅 ながせ
- 廣瀨の津福田の後室入のぶらう御殿を献け ひろせのつふくだののちむろののぶらうごてんをけんげ
- 二蓋松 ふたがせ 三蓋松
- 富田五郎重房 とみだ
- 磯の浜 いそ
- 小壺の佛舍利 こつぼ
- 枕石村 まくらいし
- 法喜山観佛寺 ほつぎ
- 法王山若重寺 ほつおう
- 幽具の院 ゆうぐ
- 御堂宝満寺 ごだう
- 多極五郎重房 おほしげ
- 巖山願入寺 いわ
- 猪原山上宮 いの
- 大門口枕石寺 おほいし
- 多食山西光寺 おほく

久米願入寺

西郊の和歌

信照山夢命

令沢願入寺

畠谷山覚念寺

王川山常弘寺

額光山若徳寺

王跡山青蓮寺

明法坊の墓

毘沙壇山願入寺

以上



親鸞聖人 御舊蹟 二十四輩巡拜圖會後編卷之三

常陸國 國号考卷二 卷之三

河州専教寺

了貞撰

外森山唯信寺 东流

常州茨木郡東産の森山の尾の御本田町あり

二十四輩第二二番宗祖聖人の門身戸守唯信法師の用基之始  
唯信房出國那珂郡戸守に於て一字と營構専教化あり

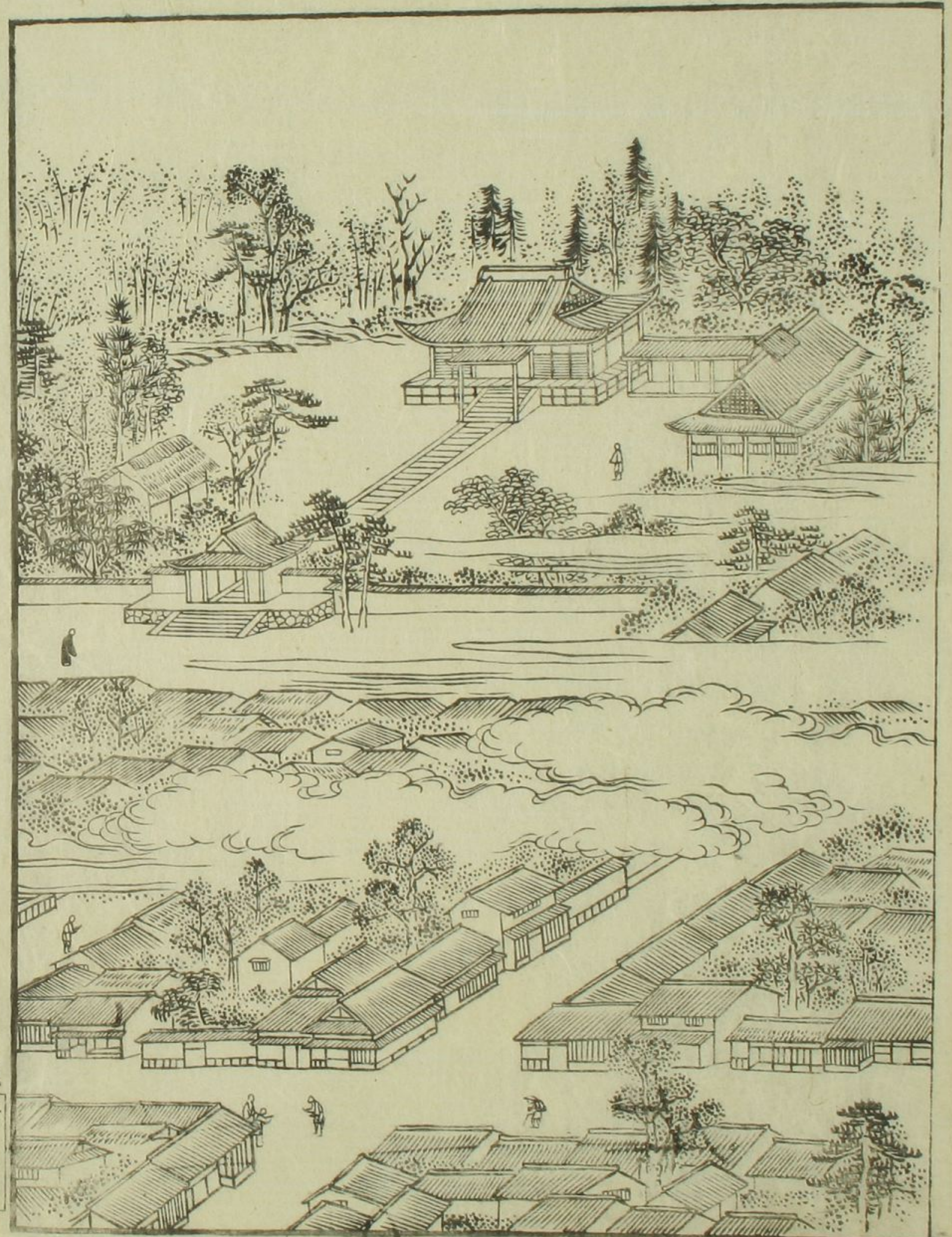
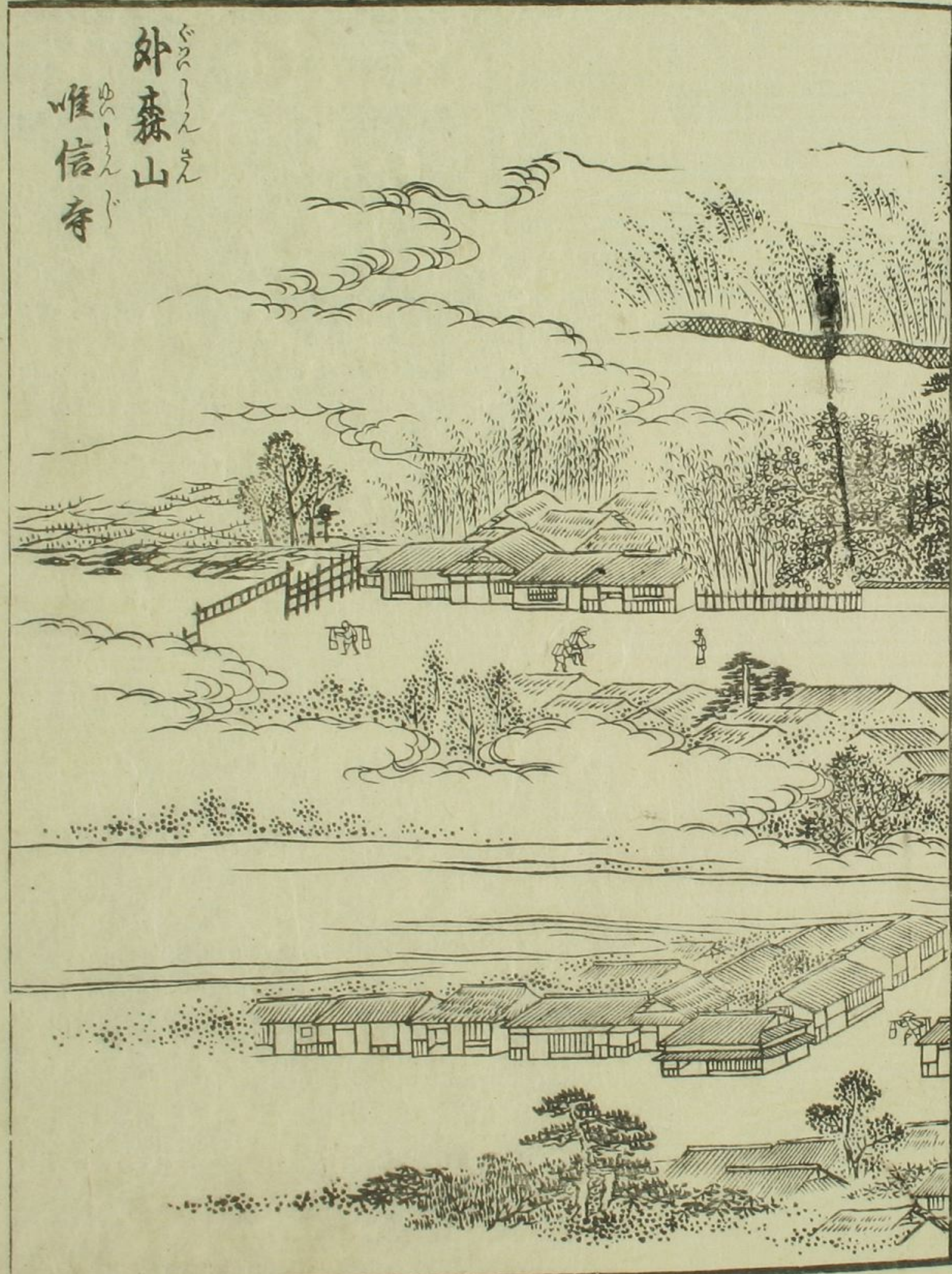
が後師命より河内國に後住して化蓋せり  
阿州淡路郡建前村専教寺に其舊蹟ありて法嗣今なお後住

これより所と戸守の旧趾退治區が中流に縁ありて今の宛戸大田町  
にありて再建し

法喜山教佛寺 东流 旧國日郡河和田村あり

出寺の聖人の後身唯信大徳の用基也旧唯信房と申す小建宮あり  
阿闍梨禪念房の息男にして大納言弘雅阿闍梨本唯信大徳より

外森山  
唯信守



と異母の舎牙之高祖聖人平治治の後仁治元年十九歳はく聖  
人の御弟子と云く千付至人 六十八歳法名と唯園とを賜り多う性稟穎悟は  
て多く真宗の温真を極め願諸弟子は勝望しうい大都平を即これを  
振啓せしと師命何のく辞とらふと得たれば終に富國と下向此  
地弘法の梵宇と貞匡是と京慶寺と号専教化あり道に交  
承十一年千付五十三歳上洛のちうう石經又依て和州吉野郡下市秋建川  
の邊に二宮と營今の下市立皆彼地は教傳又又關東よくりて  
おまじが正應元年再上洛是如上人の面謁なり日二年二月  
六日終に下市立貞寺に於て寂と示千付五十八歳其後早霜相敷  
經て元禄二年の比か山か富院の寺号と改被佛寺と称しとや字承享保の西 元其大都平

即の平治郎と云はるは平治郎の弟平治郎と云ふ若き其後高今大和國ありといふ遠藤源と  
と云ふお遠せり平治郎と云ふは唯園房平治郎の御法を承へ常州下向ありて後平治郎と云ふ親しういひ  
らひ治人を伴てありいひあやまつて平治郎と云ふ  
は云へる高橋未乃御者これと云は其年

唯園房の御事也と云はるを云ふ被平治郎が舎弟平治郎といふ若あり  
性俊勇猛剛懐して神佛を信じて只己が心と云ふを好むる妻女何  
某かの若りこれ引久明善後世のゆゑと打歎きて以て聖人富國を  
所化蓋ましくされり人志れを附く法筵は治てふく御教化と信し  
世に二心あり信女なりしは聖人持よりされし御真誓の石とて接  
ぎし治ひし平治郎の足んを降し出さし擲進し入る御事と云ふ  
なりしが平治郎かくは云ふ妻女のうらみ心多し我はあびて夜中何  
の石周るあゝんを必ど外へ通へる密妻のあまこそと一途と思ひつら不詮  
討とてそのひをもらさんゆゑと云ふ言より出はして村に所はの本派と云  
妻女の入るを好むむごころを思へりこれ妻女と云ふ今宵も平治郎  
体好むれば私と聖人の御法へ奉告し御教化を傳へし何心なく傳  
々を平治郎と見ると見るより何もうけは後打切付しが府先より  
乳のやまきく切さげらと嫌むむぐ妻女に刀のちね息と云ふ  
平治郎の志と云ふとつと物教び其候宿不へくうらむがいつら  
業より妻女の思ふて其よううと云ふ目ありく立出て平治郎の  
面とつてくまりり今宵何とうせさせ給ふ御法のさるは見え  
せ給ふといふ平治郎の志と云ふ何さま嫌はるの事と云ふお  
即ありしつとををつぶさし物語は妻女と云ふ小折縁なき奇異の



安婆電光の

向ふ方と

器を何

うめてらんや

妖即至

善徳の種あり

老うる

若き

唯まもる

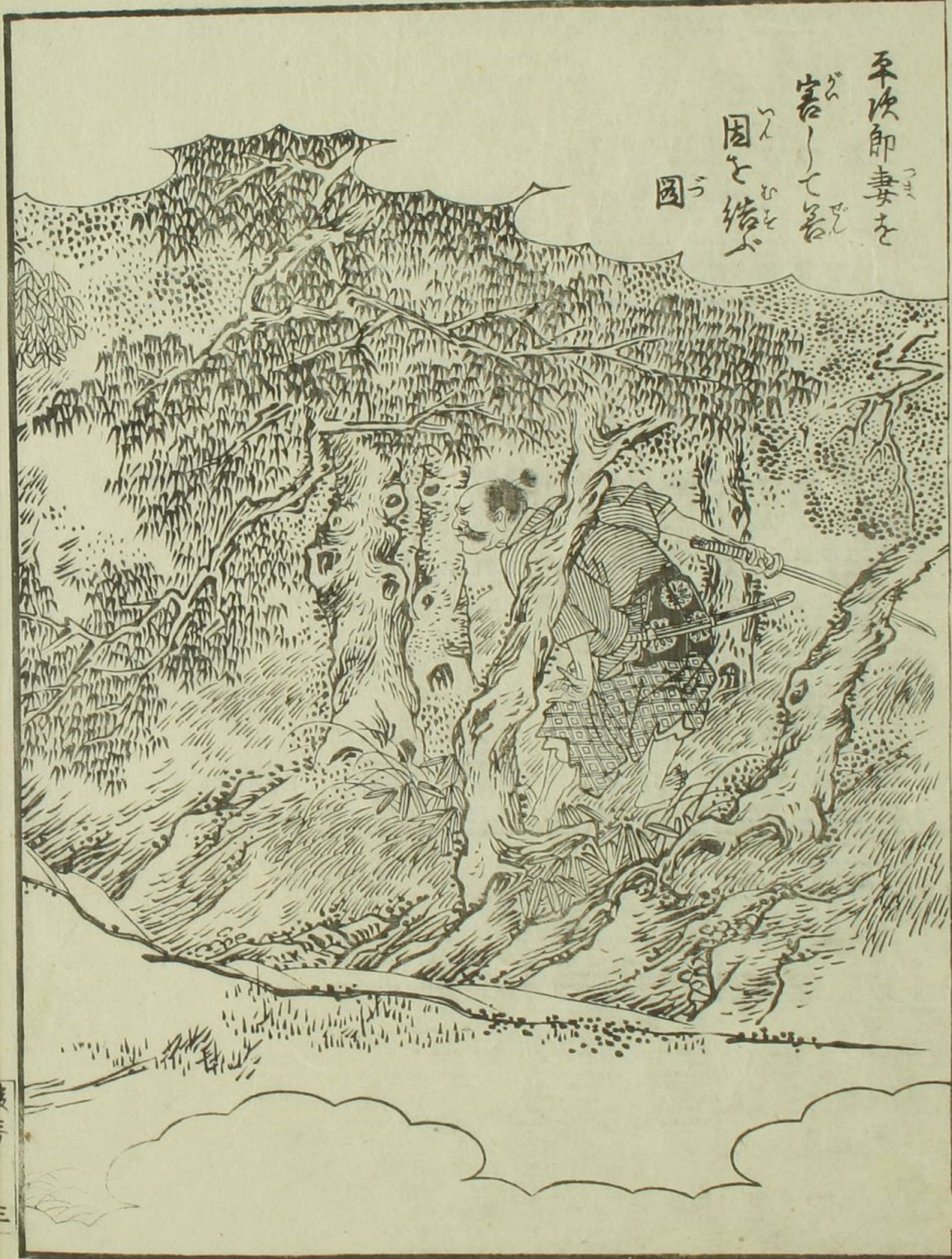
べう

あいの

妻心の

ひまろ

ちん



平次郎妻を

害して器

因と結ぶ

園

法喜山  
真佛寺  
廣林山  
真佛寺



ちひをばしつるがさうも日來志しむる所わとけの我と敵いせ給ふよ  
りやと彼攝蓮の名号を五出りてあれが不思議なるる名号の  
様さまよきれするよを妻も信心強増よるる涙をまじあはまはし我  
らどとたのりよりまう給ふの勿律るやと稱名りるよまう  
おがめをさしその平治即もかくまの何ころ奇特を見て靈  
驗肝に強つて忽ち改悔の心をせし妻女とさう小聖人の所坊に  
あり給ふ所やまうりるるとるんを名号と稱しなり和泉下市  
村三真寺第一の宝物なるの諸人のある本なり

靈室又は聖人所真奉の光明本及び唯圖自他の本像等あり

廣林山真佛寺 西流

日圓郡大郡郷 撥秀根村あり

受法院と号し高祖聖人の真身真佛房の送跡なり

下然結城 振名寺の

本尊阿彌陀如來 其外真佛上人自他の

像を安置し

真佛房俗稱平左郎とく出國大郡郷の庶民なり聖人の所門

後とありてより專信二の幼者なり初聖人出國所勅化の  
間其身既真宗の御社として佛表よるの師命は既後してあり  
とくも未信形を改め此を以て欽主佐竹刑部左衛門尉の歩級  
又馳と然野權現と稱したるが權現の靈驗を蒙り世々念佛  
幼者の繼とはなまう 平左郎然野権現の順信房を祖は仁治元年とつり高妻表の  
てを修むははけくも真佛 後入るし真佛房と号し弘長元年六  
上人の勅号をなまうしとつり 月十八日二十五歳なりて終ふ大往生を遂らまうとつりまうりより以來  
子孫僧形して平左郎真佛と稱し相續してありけるを良如上  
人出國所卜白の初し真佛寺の号を賜はしとつりや

德池山信願寺 西流

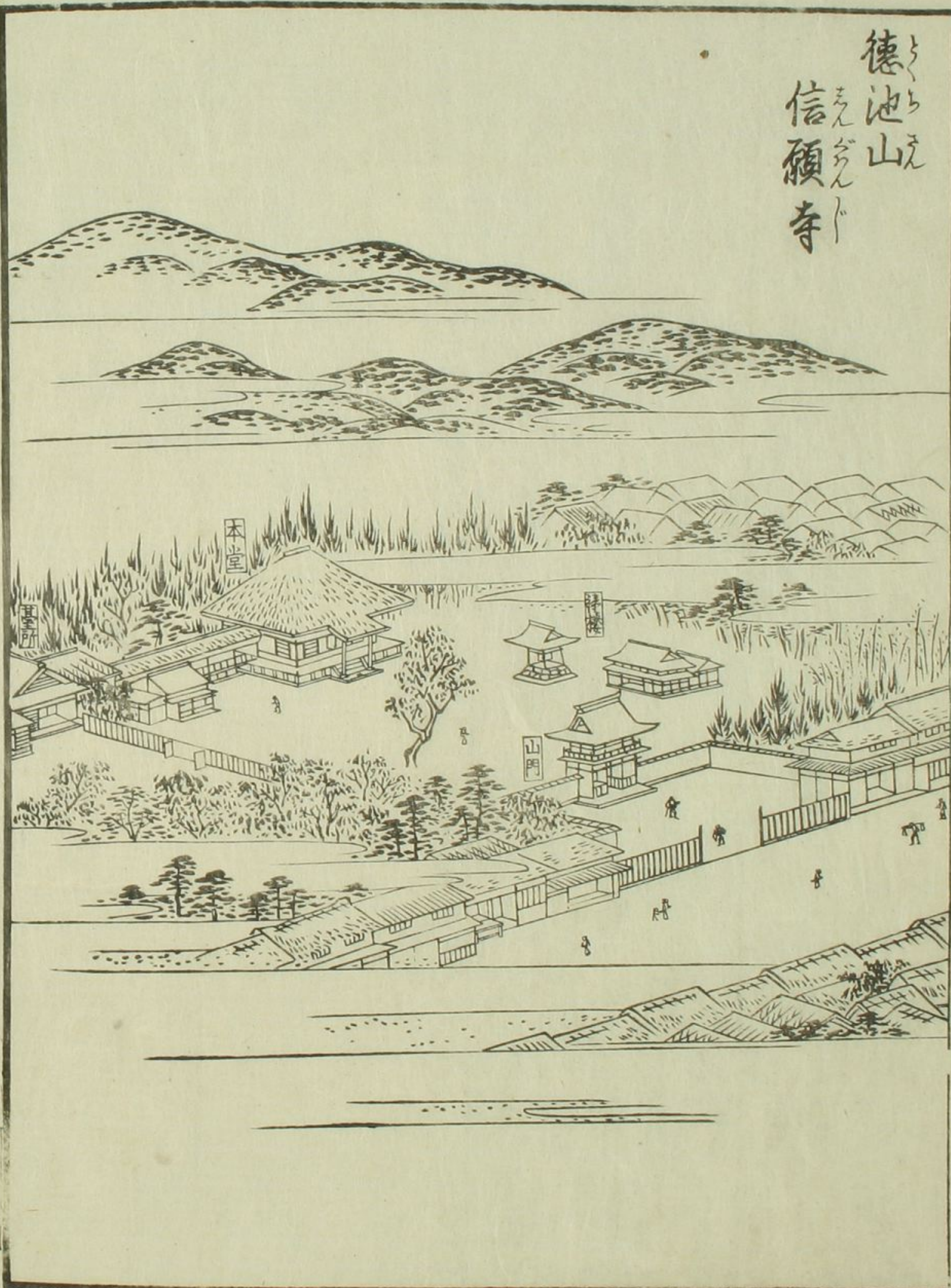
日圓郡水戸郷下 白鳥町あり

蓮生院と号し二十四輩第二十三番白谷唯信法師の芳趾なり

本尊阿彌陀如來 弘法大師の所傳はし  
て初達の所傳なり



徳池山  
信願寺

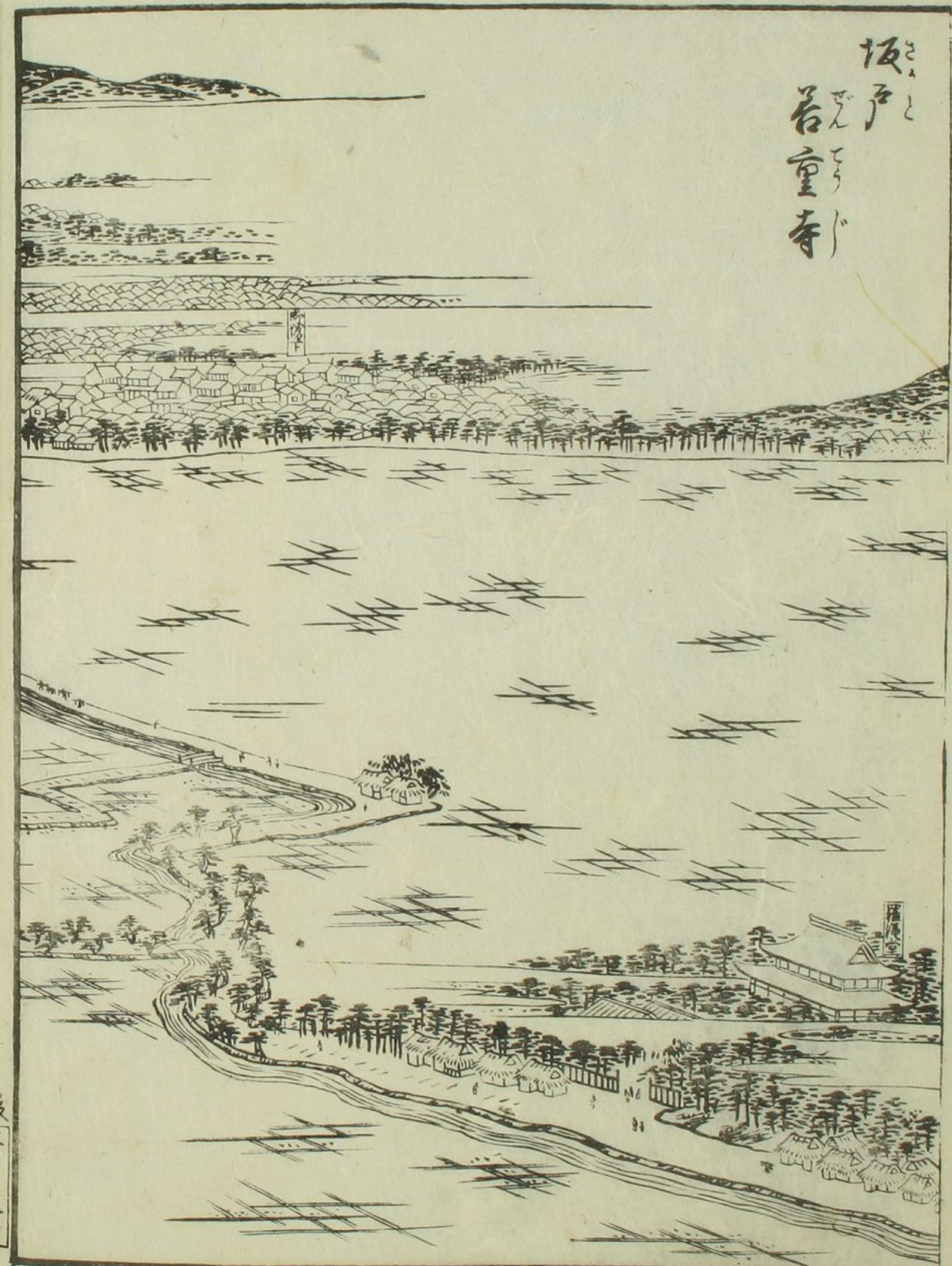
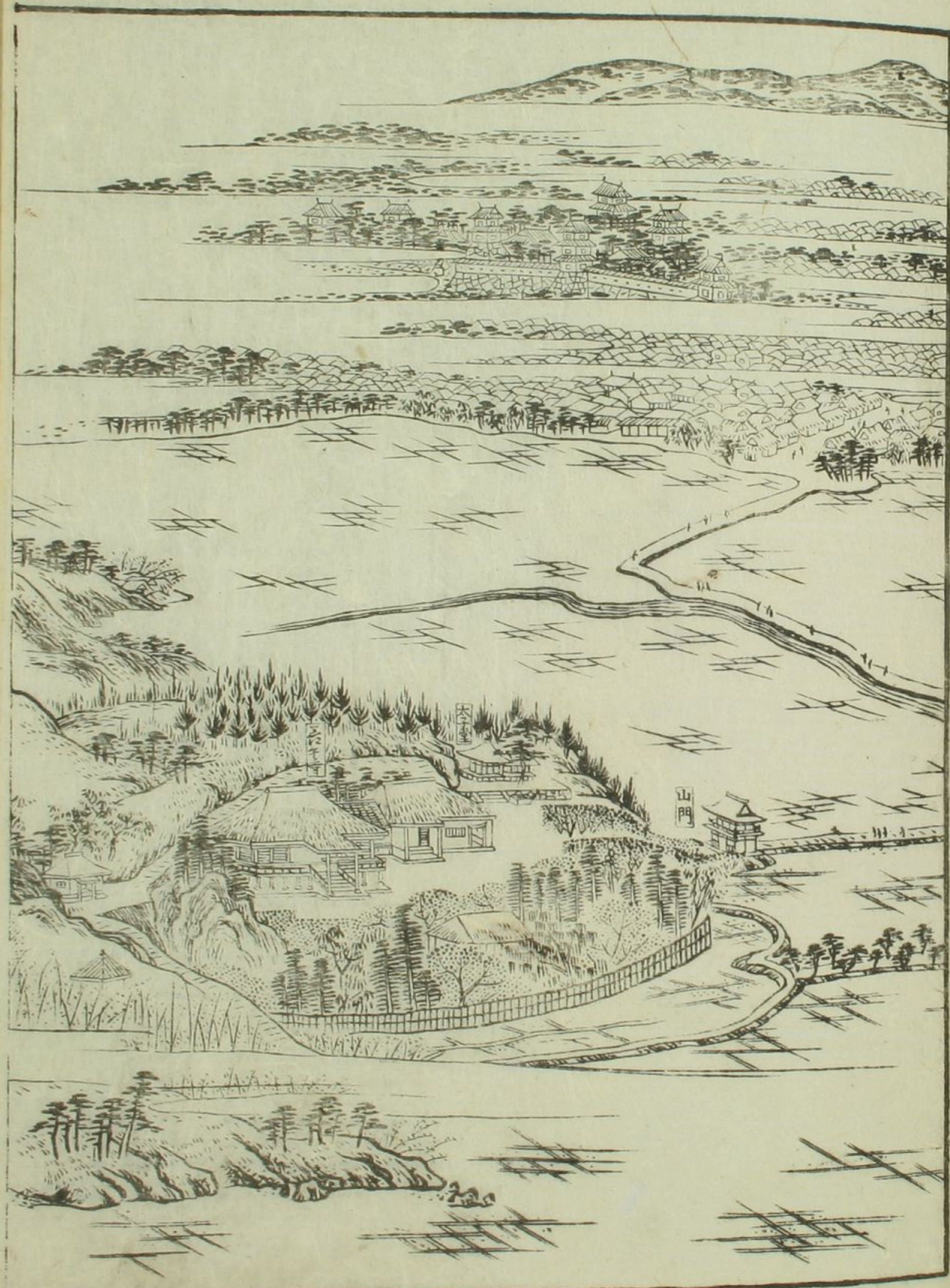


唯信房信姓の苗圃保内の恒人畑谷治郎信勝とあり高祖  
麻呂沖化奈の河津教化を蒙り直に門に入て竟に專信  
二の沖子あり又多とせん○靈宝高祖真跡の河津息  
即唯信房下  
其外代々上人の河津真子あり

法王山名重寺 本流院家 同國水戸上回 坂戸あり

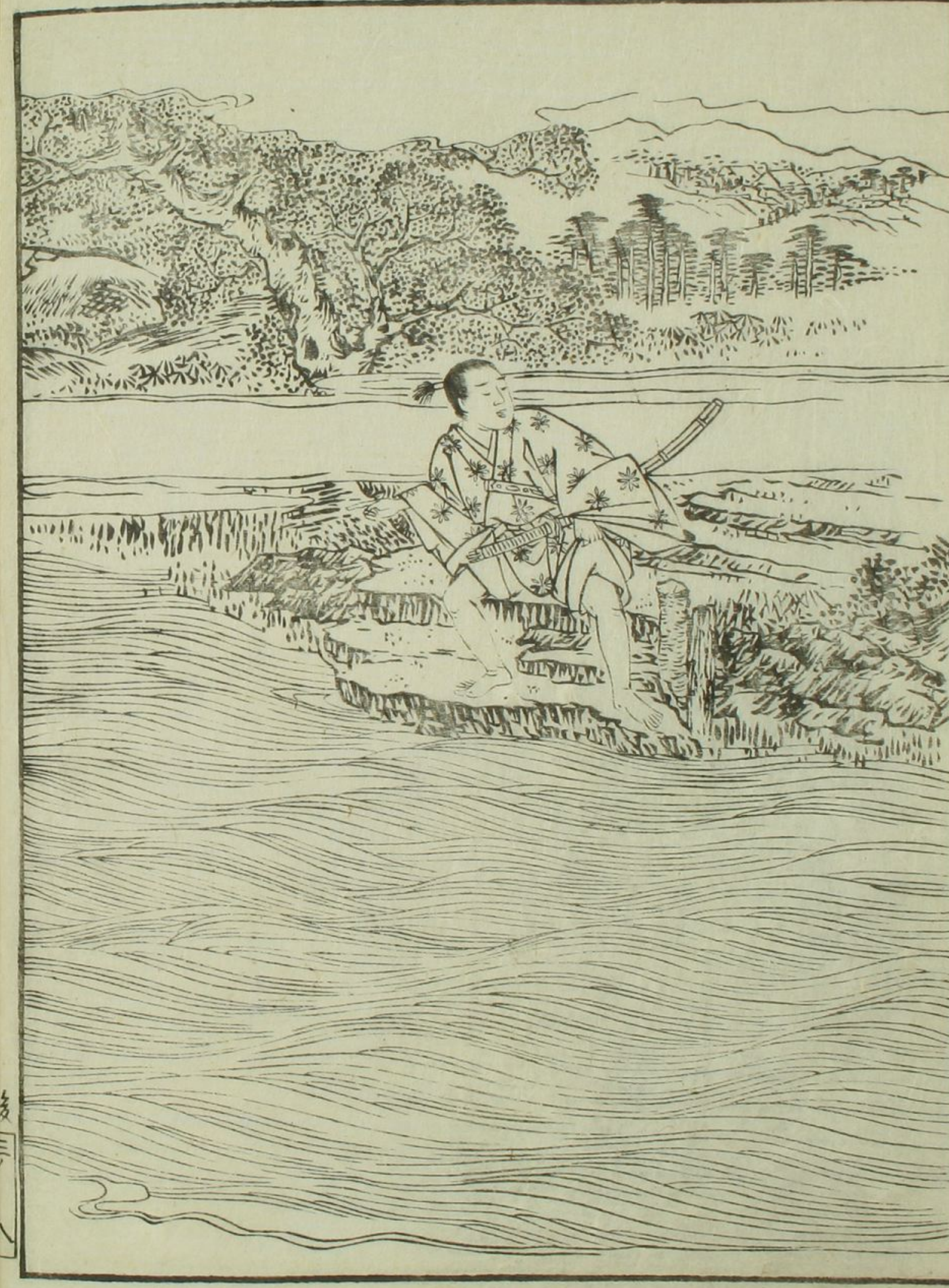
遍照山とも号せり二十四輩弟十二番高祖上足の沖子  
釋尊念房の岡基也○本尊阿彌陀佛 運養の地入春 坊舎三  
區あり

當寺の畧記曰く岡山名念房の信姓の平氏より桓成  
天皇の苗裔三浦大助義明の才岡崎に即義實の孫と市  
丸勝門實忠乃三男三浦三郎義重とあり又實忠和田義盛  
又月心一建保元年酉又月三日鎌倉に於いて和田三浦の二



坂戸  
若重  
寺

義重 初八  
聖人を  
負て橋  
を  
渡り  
國



後





狂女の海花  
 淫て様児と  
 得る園  
 樹人の  
 心を  
 風の  
 ささ  
 下し  
 花も  
 静に  
 むし  
 くと  
 とは  
 狂女  
 淫て  
 得る

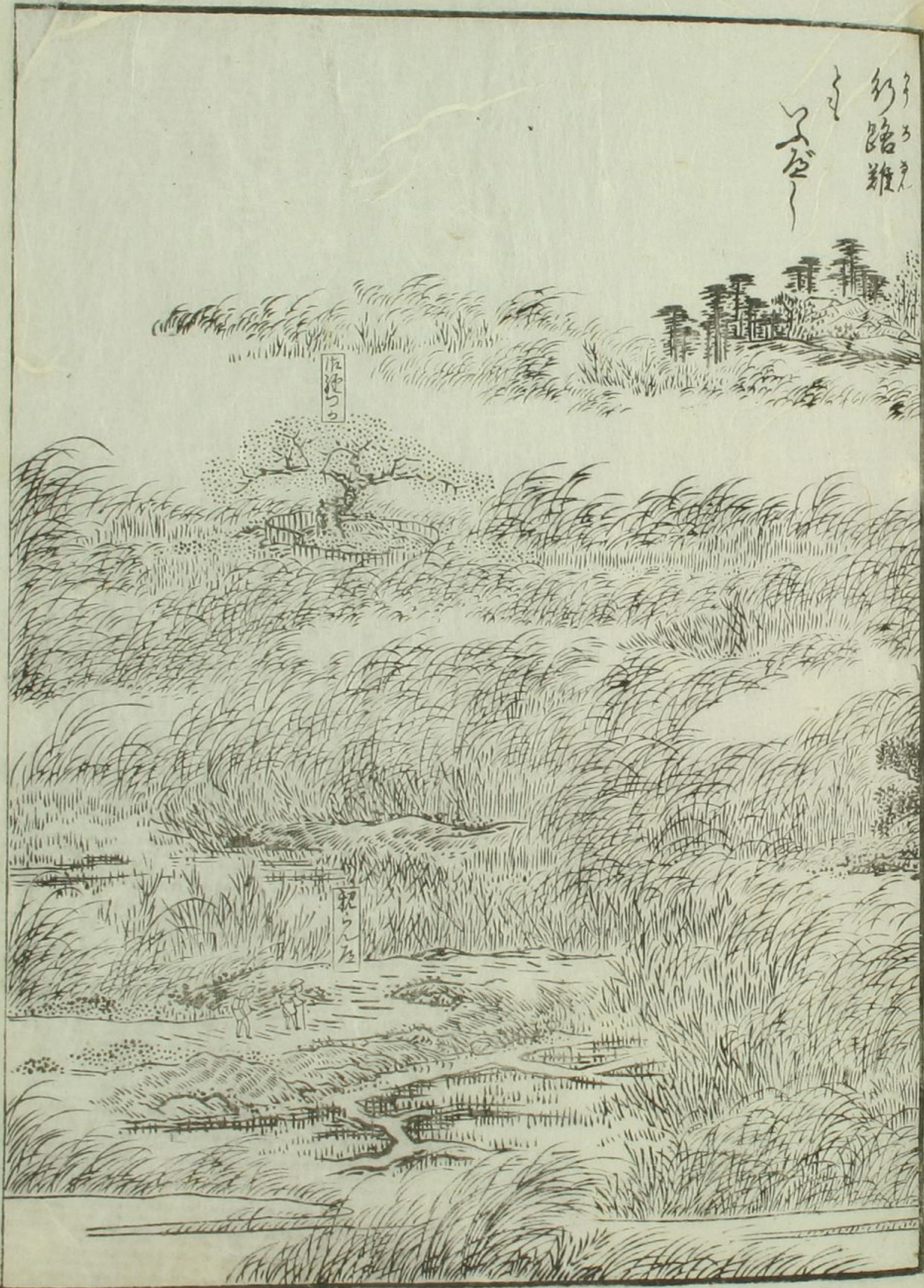


長壽喜八

東流 日田日郎と沢村とあり

先祖の平田と八郎とく代々高村の農氏なりしが或時妻女難  
産して甚危急なりしうは巫醫方と處する方はしつた  
爰に其終るに次乃又死期せまり来て若悩いそん方なく同叫  
ぶ預てそ何道外の見る目も物々しくせめて終つて縁縁の縁縁を  
助んと貴僧高僧と求むる頻りなりとて元来高僧世

其人よとせしく此や邊鄙の行田舎なりばこれをいへんとも  
の縁に縁縁はまるとく若くは堪るの種々の悪相とありし  
をいとほしく地とうち七類八例して終る眼と見えり齒と  
息絶し其ありさまも人愛相を失ひ悲きなるものなり  
うかくてあ人きやうを承けたのどく葬送を營む村の傍に  
之を懇又葬むる一族ども皆く若くは歸りてはれは生花の  
若根のよき縁縁一念の迷心よりして穢土の羈縁はきざり小や  
其疾より彼埋へ堀又陰のどく姿を散り啼叫のありて  
其怒をばくの心魂を冷し恐怖と八郎が妻女こそ迷冠と  
なりて人をさるるとんとも預り疾入に誰一人戸外へ出る者も  
なくさうく暗はしむればと八郎これと流く悲し種々に佛が  
他若くぬしてと婦の善徳を吊りてとてとてとてとてとてとて  
幽魂啼泣の



新  
路  
難  
く  
な  
る



長  
徳  
森  
八  
郎  
が  
歌

け  
遠  
く  
居  
る  
身  
を  
守  
り  
て  
乃  
を  
埋  
め  
む  
祝  
祭  
の  
軍  
中  
と  
し  
て  
切  
り  
合  
は  
せ  
其  
の  
心  
を  
分  
か  
し  
め  
共  
に  
一  
心  
を  
な  
し  
て  
進  
む  
事

乃をや  
 純  
 幸  
 歴  
 病  
 況  
 や  
 又  
 迷  
 又  
 安  
 碍  
 障  
 記  
 一  
 漏  
 子  
 即  
 毛  
 純  
 の



与八郎が妻  
 死して迷宮  
 とある國  
 人  
 幽  
 冥  
 の  
 事  
 者  
 御  
 子  
 平  
 日  
 又  
 其  
 事  
 其  
 事









結する程に於て高祖御入ありて其後ハ与八郎が家に宿  
終ハ終極御勅化ありしうば与八郎の具ニ化カ奉教の名号  
を受得し一聞法踊躍ニ入信實ニ難有キ信心無二の優婆  
塞ともなりけるかくてたまぐし聖人を郷食應々が聖  
人も渠が信心深うござる所御喜悅のあまり携り給ふ所の  
三ぶくの御画淡と与八郎に授与し終ハ終朝別を告  
て出立給へが与八郎御跡の慕しく赤飯をりのして乞と持系  
し送りなり中根が原とつふ所に聖人よとめ給ふと  
又此急時すま著を忘ししうばいせんと傍を見るに葦  
ひし生うり即これと切てよく清めとめまつせうハ聖  
人渠が心づり方をめで給ひ心よくこれをきじしめ彼著  
と地又と終ひてり我眞宗退代ニ盛んさらば此著根

芽を生じ給しと終一宣いしと思議方ある彼著次芽  
又芽を出し今又夢り生じしや  
機一筆して東西條より著と別  
終るがに「聖人」と御著の序と  
かくて与八郎の終ニ聖人ニ別をなす自つくおふや  
妻の悪念の却て是著提の種とあり我らとて法の法はしき著  
と難有御教化を夢り弥陀の本願ニ過るや何の歎じ  
是又如んさ何んか此喜ひ子孫につえて忘るべしとて即名  
を喜ハと改め報恩の称名をなすく堅固ニ念佛はしむる  
しや  
今うまゝ疾ハをみて通稱  
ととらるりのゆえんとぞ  
○彼三幅射の御画淡ハ中尊阿彌陀如来  
三方に面して光明の中ニ十二菩薩  
はしてそのく光明建あり 右若守大師  
はより三つふたあり終る所の御方  
右に依取し若我佛十方衆生の深き 右聖徳  
橋の橋の殿を御皇御御講淡し終る所の御方  
陸わた殿を御門統を御皇御御講淡し終る所の御方 右此三幅ハ聖人御自畫御自  
淡しと世に難有之ニ二回に方ニ別堂を志門らひ是と安んじ且喜ハ  
が奇特よとて固守より除回と稱ひ毎年會式の法に終るは

漱又主家の系として六百年の星霜を思ひ今又家名が(代々)不退轉の信心をく聖人の御遺物を持つる多漱又目出度家運と云ふ

○所傳場り喜八が宅より八丁御南より即与八郎の妻の塩方より女人成佛の塩方より

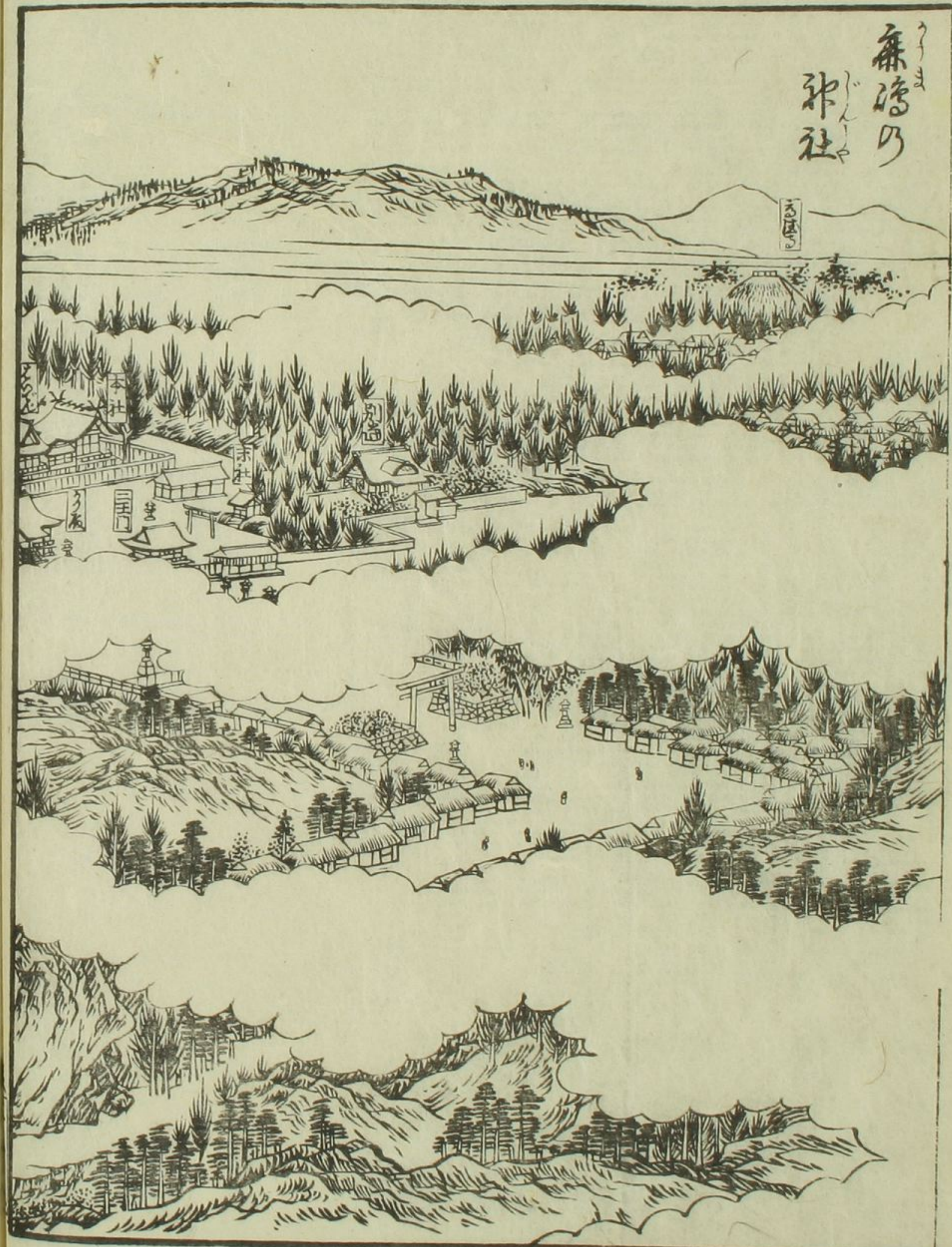
○中根系又系根系より村より十丁より登方より石の傍より十間四方後より一面又草系より一葎より二葎より三葎より御着の草を

蘇碓大社宮

旧國蘇碓郡蘇碓はもと延喜式水名帳に名社又月次新嘗

尚社宮より右の御社一座武甕槌尊本地の親音薩埵とては海陸既く和光の跡をたれ給ひ神代のみり経津主神とて小豊草原の中津國と治め給へ雨より以来師の靈の神劍を以て災害を拂ひ魔障を伏し我日本を鎮護はしまよより我民支那のよりうまを神風を仰ぎよめは猶も小遙の星霜を経て嘉祿二年十月中

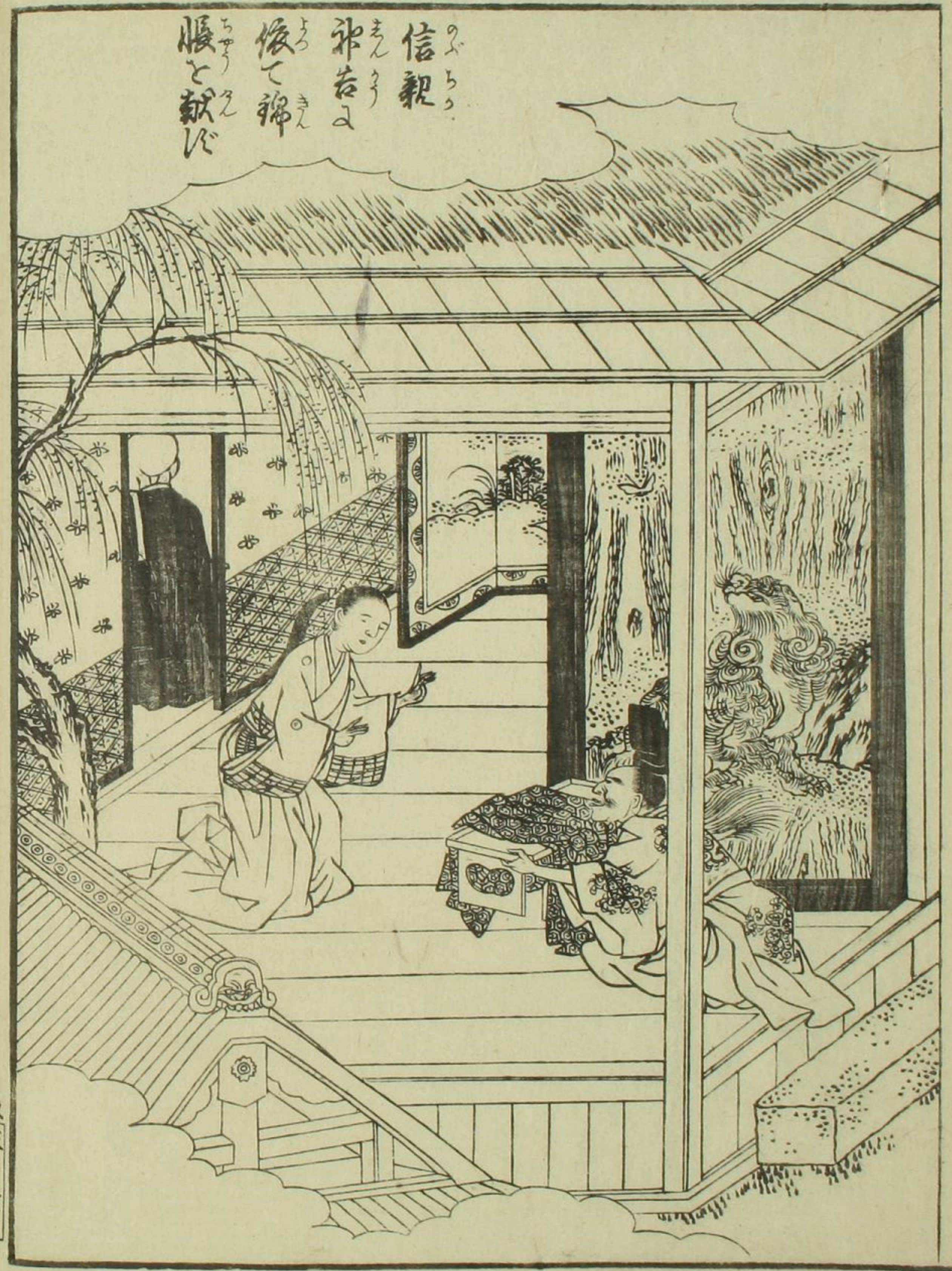
向高祖親鸞聖人は臘五十に歳の御時當國稻田の御坊より尚社(系)流ましく多小内隆冷然なる神慮より聖人と傳へ給へ給ひ即ち教ふ歳のむじよあつて衣冠いとうのまき翁と現れ日く夜く又稻田の禪室よのちと運じて聖人の御教化を徳圃に給ひ又始の禪と門後の僧侶も何心なく思ひこせしが目を經る小陸の衆人等を怪しこかく老若美綺抄はじりて群系と申す中又一際同立く本蘭地の巫女烏帽をかけたる老人こそ人とははら給ひて換奇特の人よそ押まらん下向の砌跡して易ぬと成るこれを伺ひて門外に出給ひやいな急津姿をまひ曾て歸り給へ石を知る者なれば弥乞と疑ひ聖人よかくと若きりしは聖人といくす彼翁の神通と云はれんといふことと門侶の傳り給ひびさるるもあはしむと宣ひて打さ給ひ多小或時彼翁聖人又福し給ひ願く我利カと掛け給ひ法名を揚りて御門に別





秦の神  
稲田の禊室  
又 諸氏

信親  
 非若  
 依て  
 腹と



結つゝの廣大の恩徳ありんと滑仰まきりたりしは聖人御瓦を最快此  
 として其すそをゆるし給ひ法多分信海と書して与へ給ひ翁ハ不願満足  
 の歎ひよ之に聖人ハ九拜一卜向ひたり其日則刺殺の儀相を備へて  
 糸指く厚く知恩報徳の礼をのらじしに聖人も値遇の儀ありて居  
 をめで給ひ自十字の名号を御深筆あり其脇ハ信海房と御對座の  
 御親とまうり加給ひ後の世乃たじしと御坊又こそいと先給ひ  
 今福田西志寺ハ徳来とるもの什物これなり御極  
 今福田西志寺ハ徳来とるもの什物これなり御極  
 信海御房やされたり我れ又名執用後の歎ひ又我座を以て七ツ身とて  
 清冷の水あり其内一舟を聖人ハ寄附しなると折去ひ給ひ又石  
 恩儀や其疾忽ら御坊乃我座又清涼涌出せり  
 今福田御坊ハ麻湊  
 今福田御坊ハ麻湊  
 聖人曾て其の恩儀を自彫刻は給ひ御坊ハ安んせらじ又信海

房戸帳を捧献ありて聖人の恩徳を頼たのみ給ふ  
枝桑鎮護の靈神ありて聖人乃徳輝を見て和光の方便を仰ぎ給ふ  
在りて一叔も其後寛喜元年壬申宮の神宮尾張權次信親信親  
寺の宗 又託宣して曰く我此以稲田は清親親鸞聖人とて入達徳の知識  
を降依し直に御弟子とあり法名をうけ取り不願後之のうしよと  
戸帳一掛及び清冷の井水を寄附せり依とてやう小我擅上の神帳を  
おいて稲田の所坊所坊献じ給ふ若きを授せんとしつ七ツ井の其一ツハ既  
先達て洞湯に彼地は清泉涌出せり勢く魁々なりと御教新新す  
安へさせ給ふぞ信親大又給ふき即時に神殿ありてこれを何人御  
戸帳の内より脱出して法名釋信海と書る切紙あり其と井水の應徳  
著明信親給と奇矣の思いと由り此の靈燈あること何の疑ひは  
と未福しとせざる小忽ら聖人となる信しと交換御志の神帳と稲田の所

後三ノ廿一

坊坊持係持係一よりありし奉りて物を授けし日ごとく御弟子とありしうは  
法名を順信と号し鳥栖至堂壽寺の寺勢とぞ世なりたり  
清傳を舎  
授て祀り

- 度徳寺にま言宗ありて由社石沙沓渡經不方り由寺は聖人御真意  
を神の靈像あり赤童子の御親と云ふ御書あり御日書あり又云神の  
神等とて聖人の御像あり此二神はの御親と稱れ給ふと云ふ神宮信親  
不願と云ふ御書あり神聖人御對座より畫給ふ不方りといふ聖人御真意の信  
海房の靈像は此餘西念寺至聖壽寺森岡の至聖壽寺ありあり
- 七ツ井の流湯御志のあり宮下。の志ありとや。とや。ふと云ふ。此上は  
本社より寅灯の方二三丁係あり
- 要石本社より辰巳の方二三丁係あり相傳へ由社を神の御御志此由の  
齋燭なきりの日の本を守らんと宣ふと云ふ
- 由社年中御神多とて七十五歳との中より常陸守の御神多ハ別由  
神宮寺の御勢あり。後於抄云常陸守の明神の御方の日女のけさ  
う人のあまのつらるる名もを布の帯と出つけて神衣に垂たりと云ふ男の  
名書ありそのつらるる重く入るなり女さしと云ふ男のれいやとて云ふくつらるる  
云ふそのつらるるつらるるつらるるつらるるつらるるつらるるつらるるつらるる



○世々様々なるものありまじらざるに由りて社を神に我秋津洲に根の  
所神あり八百万の神にも先由社ありありはひく後諸國へうつ  
たつてやる神の所教とく

○宮居とる石の神もいふにまじらざるにひくまじらざる

○高岡の原の山その東の方あり又大和より曰名あり

○とてく此うらを麻路の浦とて又うらとてはうら麻路より一里餘り俵  
あり良王集より入るは

○高岡の原の山その東の方あり又大和より曰名あり

### 河堂宝満寺

西流内陣 下総國神子の浦あり

宝満寺の麻路明神より息極明神へ出せしよりいさ系とのをさだ  
とててはひ八里やて神子浦とて香光明神へは宝満寺より八里の  
此間深路のたつた砂礫とて其難をこれより麻路大松津より松とや  
とててはひ宝満寺及び香光明神の幸法は下総國の都に委く出ん

### 筒井極樂寺

真言宗 常州麻路郡筒井村あり

由寺の往昔宗祖聖人河化益の地方なりといふ○什物聖人河

真蹟の光明本并阿彌陀如來の畫像 光明の中は名字及び  
河法名をそのせらとて

其外聖人の河本像 河本像の梅 寺あり聖人  
の自極樂寺とて

○息極明神麻路より二里由社の聖人曾て二百ヶ目の同系翁は

法ひ河田跡といふ息極より十八丁筒井村ありとて又は彼息極

西のありて津去宗の一院あり往昔宗祖此地より河化益

ませり此佛の供へ法りて小松を極楽法ひく真言宗世

盛ん方り小松の法なりとて今もまた丁に方り松とて

たり然も本立といふも三に尺なりとてゆへ人させ法極の

僧とて少しもさるく立のびさるこそうきうに何とて三蓋三蓋は

心をせしむるなりとて云斗はしるふす門く河戸中一宗の供

華ふはとて此松の心を司也といふ又此松林中一基の極樂と

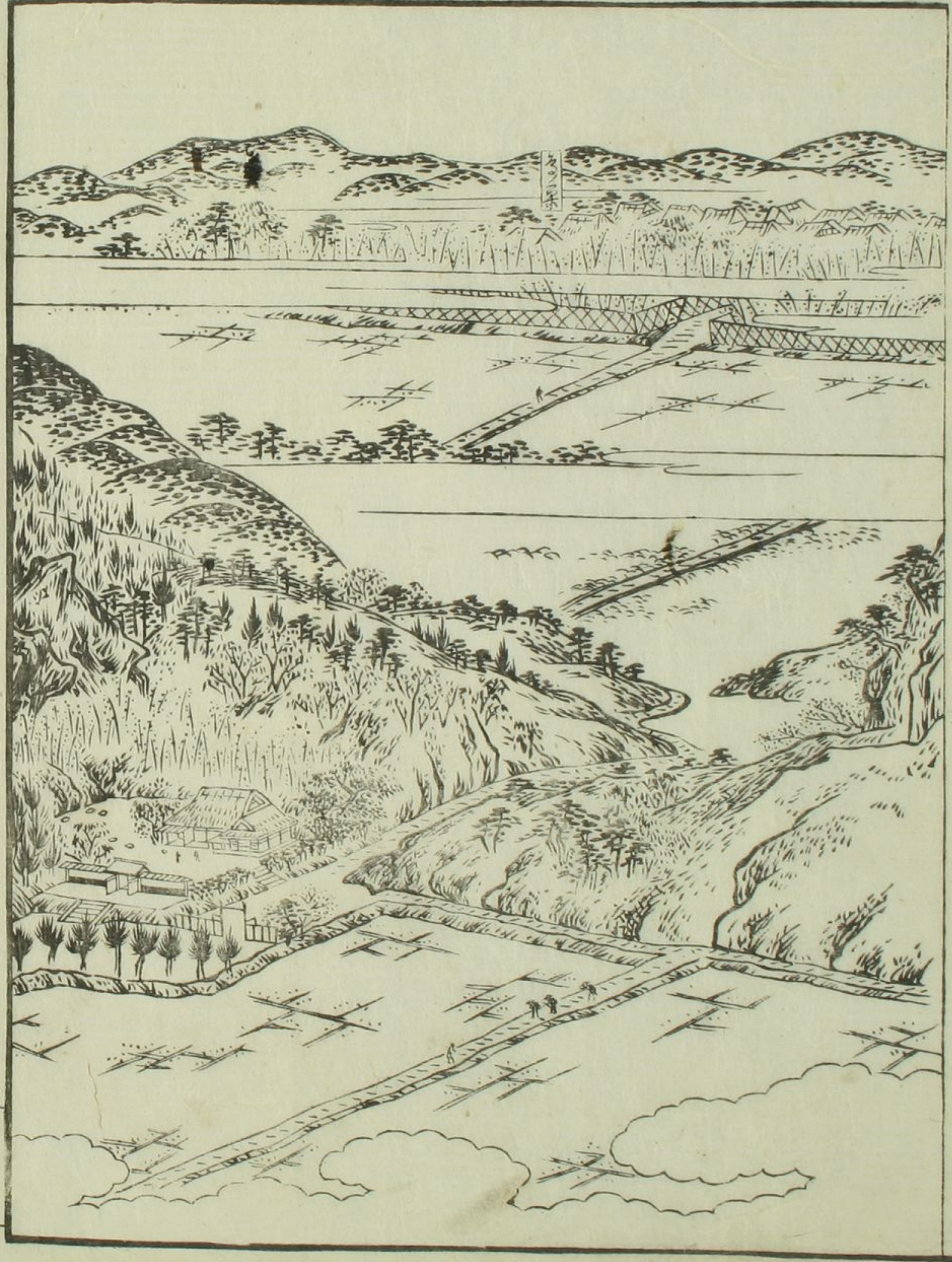
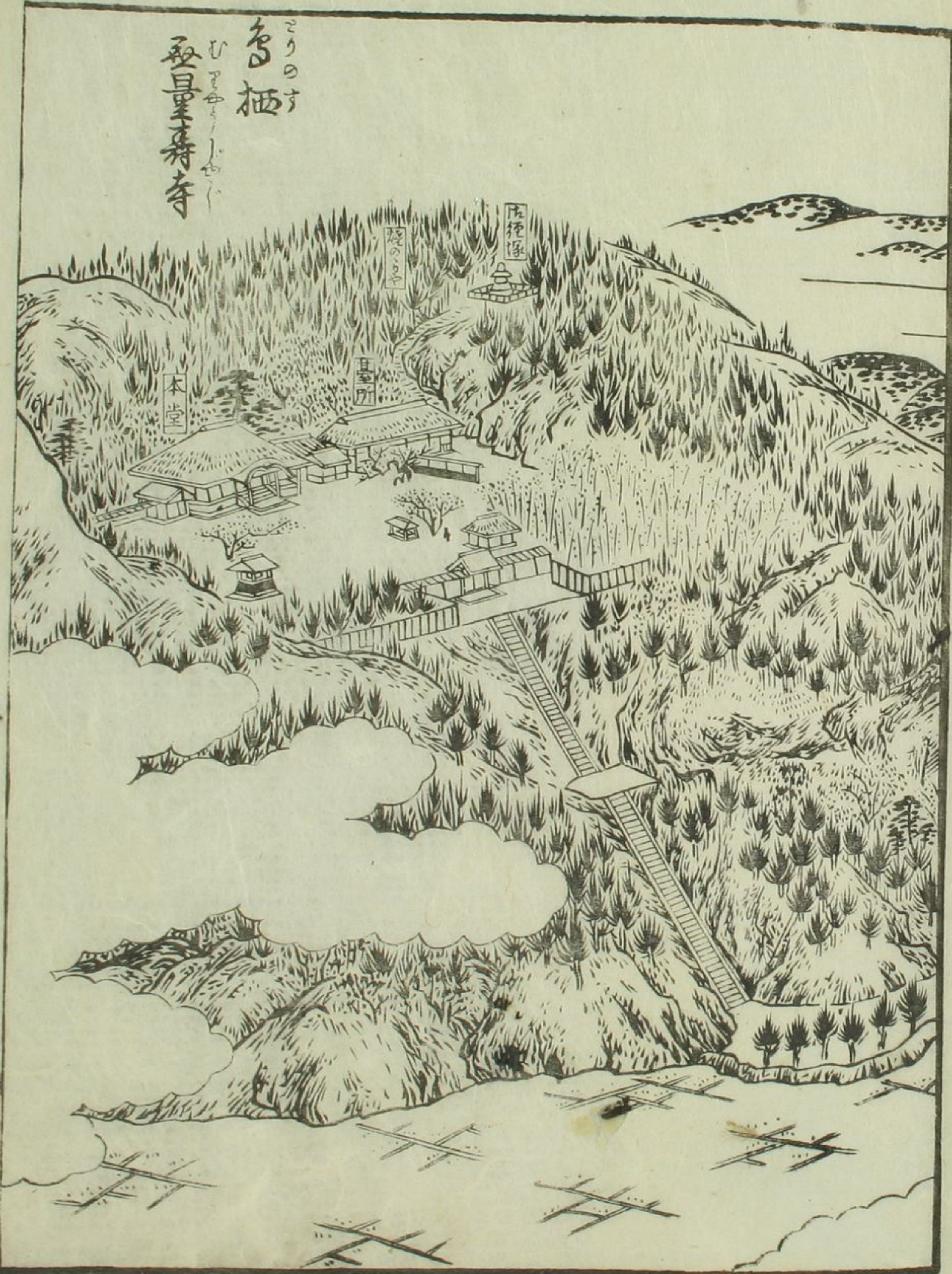
いふあり聖人書写し終りて乃經を埋むこと後方なりといふ

○巡路の此石より又麻路へ戻らざる

### 光明山無量壽寺

西流内陣 河國内郡  
名極あり

こりのす  
多栖  
ひまわり  
五量寺





刑部之妻  
威佛して衆  
人此後入國

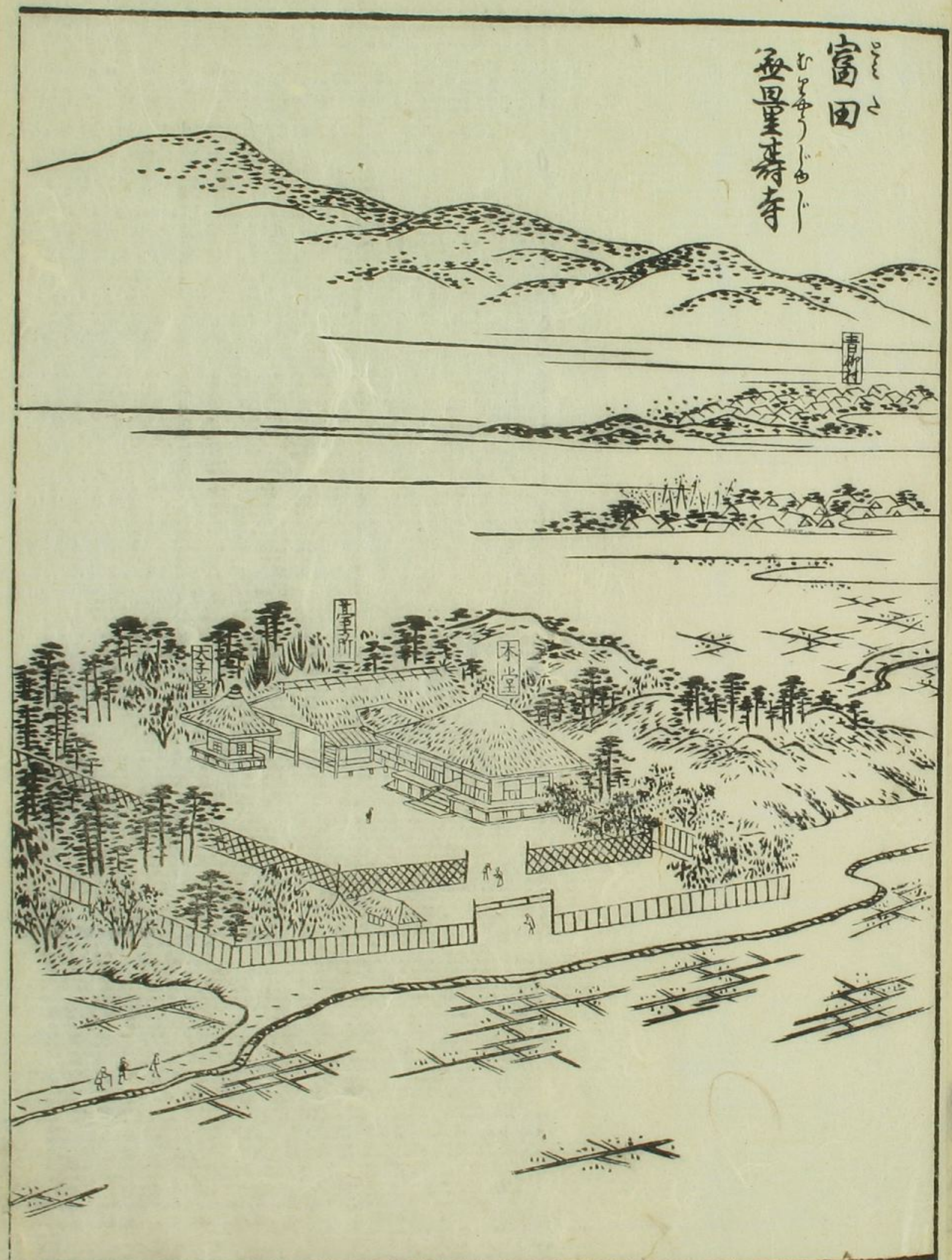
十日の祀  
不十手の指  
さへ不必ず  
送るは  
衆人の後  
威佛の相  
まへへ  
人此のいゆ  
さへ不あれ  
いこれや  
後のま

二十四輩第一番聖人の嫡子麻呂順信法師信姓麻呂明非の系なりあり  
相續の芳趾して曾て高祖ニテ年の間寄寓はし終る石  
の靈場なり○本堂阿彌陀如來の像に聖人の河自他之所  
長二又三寸

尚寺の靈場を尋る小徑若大同年中の用圍はして吾等  
寺と号し法相の宗風をき梵刹なりしが其後幾百回の  
星霜を経て下根の僧侶次第は持律の教綱を修む者  
く寺院も稍朽傾よ及びる文治の以尚國の刺史村田刑部  
と入る志願のあり遺構より再び營築し佛心宗  
のる場とせり終る小刑部が妻女徳産のわく大又悩終  
所しくなりし程又即尚寺を葬りて之が堂押りんや五障  
の業業深くして終終顛倒の一念忽ら億劫の迷鬼と現し

疾なく啼叫ぶ怒まきりたり村民これを愛者大に恐  
吾等寺りこそ産女て化生ありといふが小唯一人  
流る人あり後には住僧日宿までも思まどひく途  
よりそれが後我の荒廢の寺院とせり村田刑部是  
を大に悲と追福修善をまぐかりとてとらに止む  
くききく業ぐぬい多おしし兼久三 奉の林宗祖聖人尚國稻  
田の河坊より麻呂順信はし終るの數うて諸人その徳  
彩と仰ぎ願る化益と蒙る者あり終る相た村田  
よとめ聖人を屈信し何年海度の化益をりて幽魂  
を一時に教し終りて一境の収ひ廣る吾人の恩徳をん  
と折致きたる小聖人弘法は河原に下りとも十方世界  
攝取石捨の河折言は彼一人淺んといはゆるか

富田  
五里壽寺



即玉趾をめぐりしれまぐの小石は三部の令梵二万六千  
 六百餘字と悉くもつづき書字し終ひ彼境に埋蔵  
 穀附の祿名いと懇々唱へ給ひしうは權者の奇特著明  
 く其疾よりして遠寇の苦寂寂として止まらざるの  
 らば刑部とせしむ村民等彼妻女の生るの次第其ま  
 一斤の此糸雲は駕「西方は龍よりぬく一日は乞と夏見多  
 なる不思議のといとる中よも刑部の取捨する靈驗  
 信心肝の銘と隆喜の源とありありなるが幸當附  
 候ふれ何とぞ聖人を彼寺よむるなり所教化とも徳  
 々と村民等とこり小聖人の所被ととるこい徳々々小聖  
 人つくぐと石にやう有縁の衆生に化と終「安く且席  
 の往返や、程をたれが我憎く此を院に寓は」と即田名

又壽の字と加へ極聖壽寺と号し竟二二ヶ年乃間當院に  
漸勃化はつくろとせん當寺三年の漸壽寓の楢田  
漸澁箇十ヶ年の内なりと云此時の漸教は

彌陀たのむく海をとおせまゝ人のかりる法と見るに付ては  
其後漸教順信房へ漸附屬ありてより順信順性順慶次才

又當寺を相承はははる大谷送跡録は順信房の信親が二子孫漸次即信房  
の命よりしと聖人の漸教あり順信房性  
先づ山に在りて聖人彼にして西海を化しめはる今乃○宝物漸教大明非

法神の本像聖人釋信海漸法名漸教明非の法  
名は聖人漸教連坐漸教聖人



上は國とるなり聖人ゆはく書字の漸經石なり於州大坂上後  
明徳所の後釋惠教のゆを於て漸跡巡拜せりしおろく彼經塚  
又抄ひて拾ひ得しとてこれを免せり

光明山無量壽寺 東流 日國日郡富田村あり

當寺の鳥極聖壽寺より乃寺はして二十に軍第三番

順信房の用基なり順信房の信の漸教明非  
及び極の事あり○什物高祖聖人漸

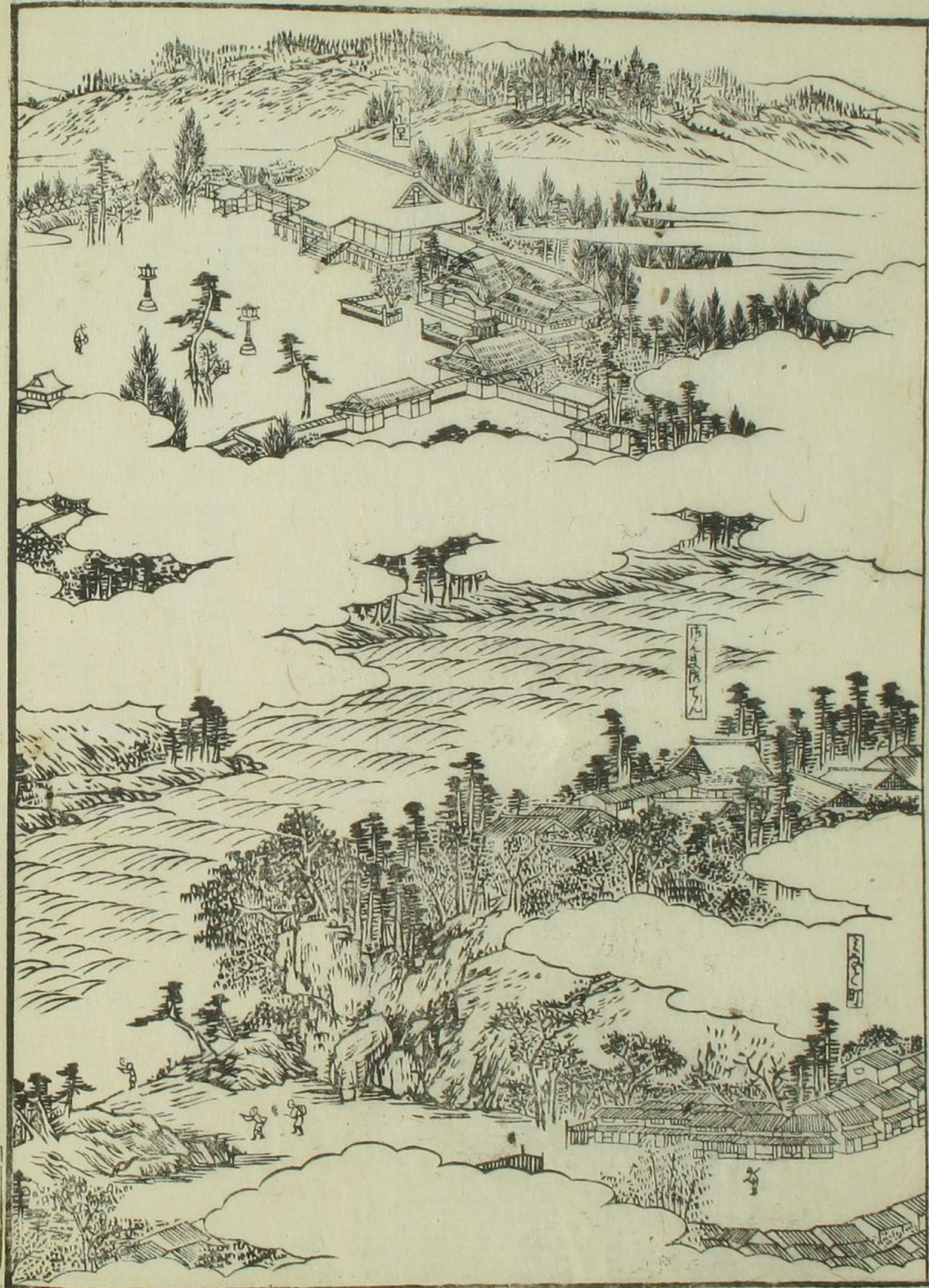
真淨の光明本并 院樓の名号順信房の  
院樓と畫はる

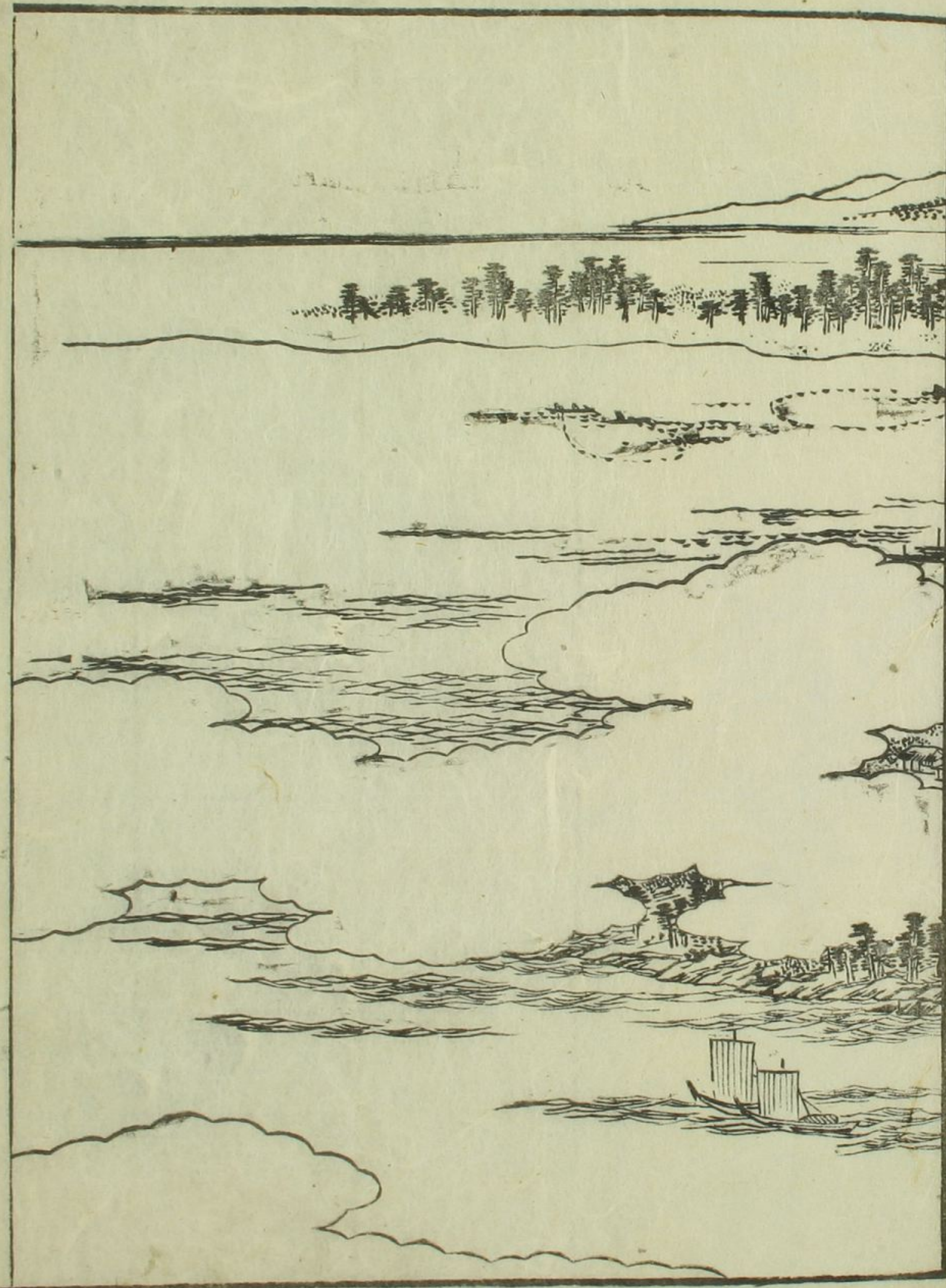
巖船山願入寺 東流 日國宮田巖船あり

當院の高祖親鸞聖人の漸跡如信大和尚の遺跡はしる當  
國第一の大佛場なり代り漸連枝漸信感みく寺極最殊る

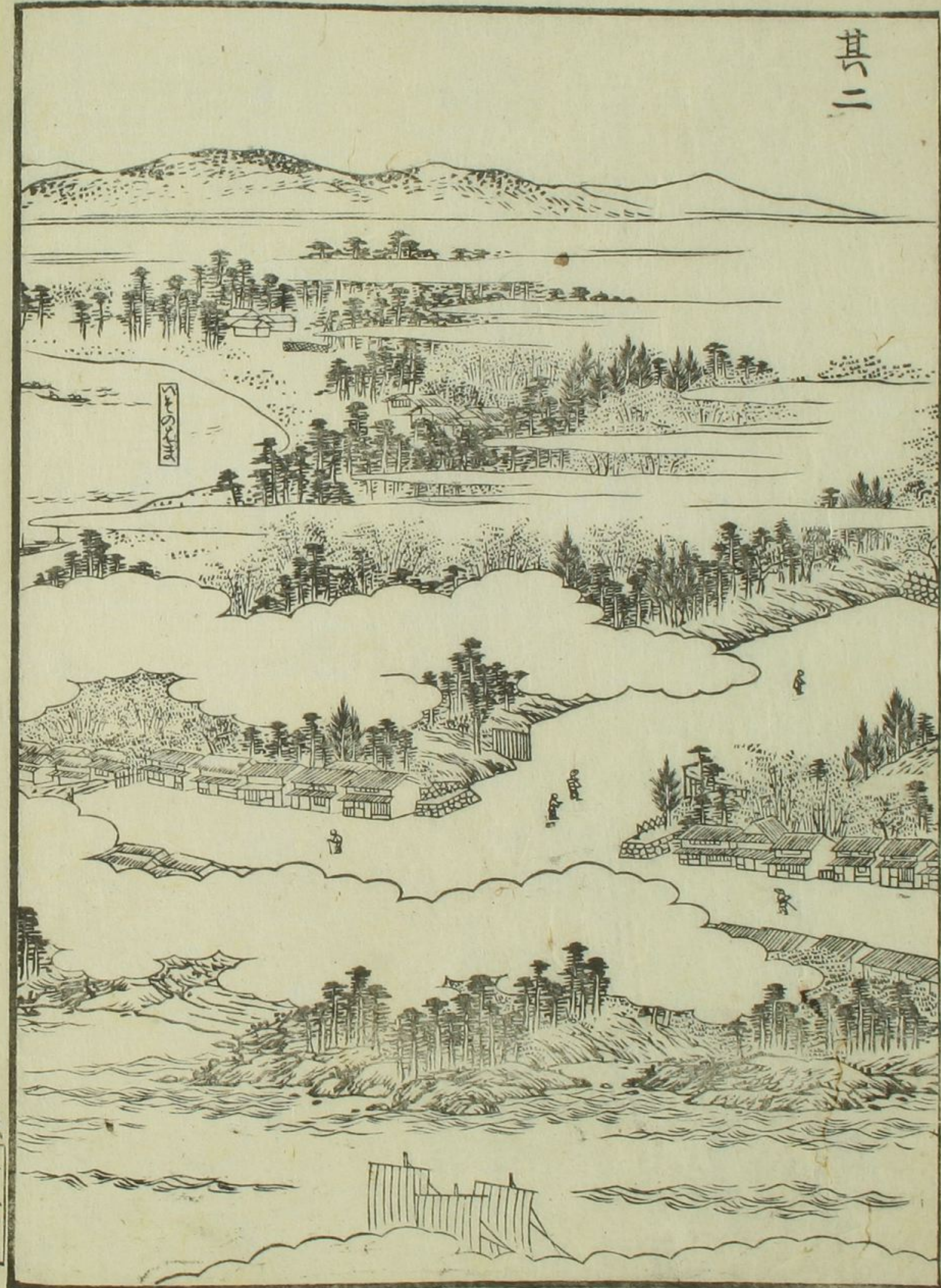
○卒堂十五間に面本尊阿彌陀佛春日の他説は  
漸教あり

當時國表の亦他の如信上人の本像を安置は坊舎六ヶ寺あり  
傳ふ云く如信上人曾て奥州大綱の東山に居るとは法ひくは  
先即秋入寺 漸勃化ははる者郡國と傾け徳彩と仰ぐ軍遠  
の盛揚あり 近の隔ははるは彼禪室をさるるの三十里坂東の六丁  
一里をさるる西は河之内  
て金澤とるるは素若とるるのあり就中卒願の前後と





其二



後  
三  
九





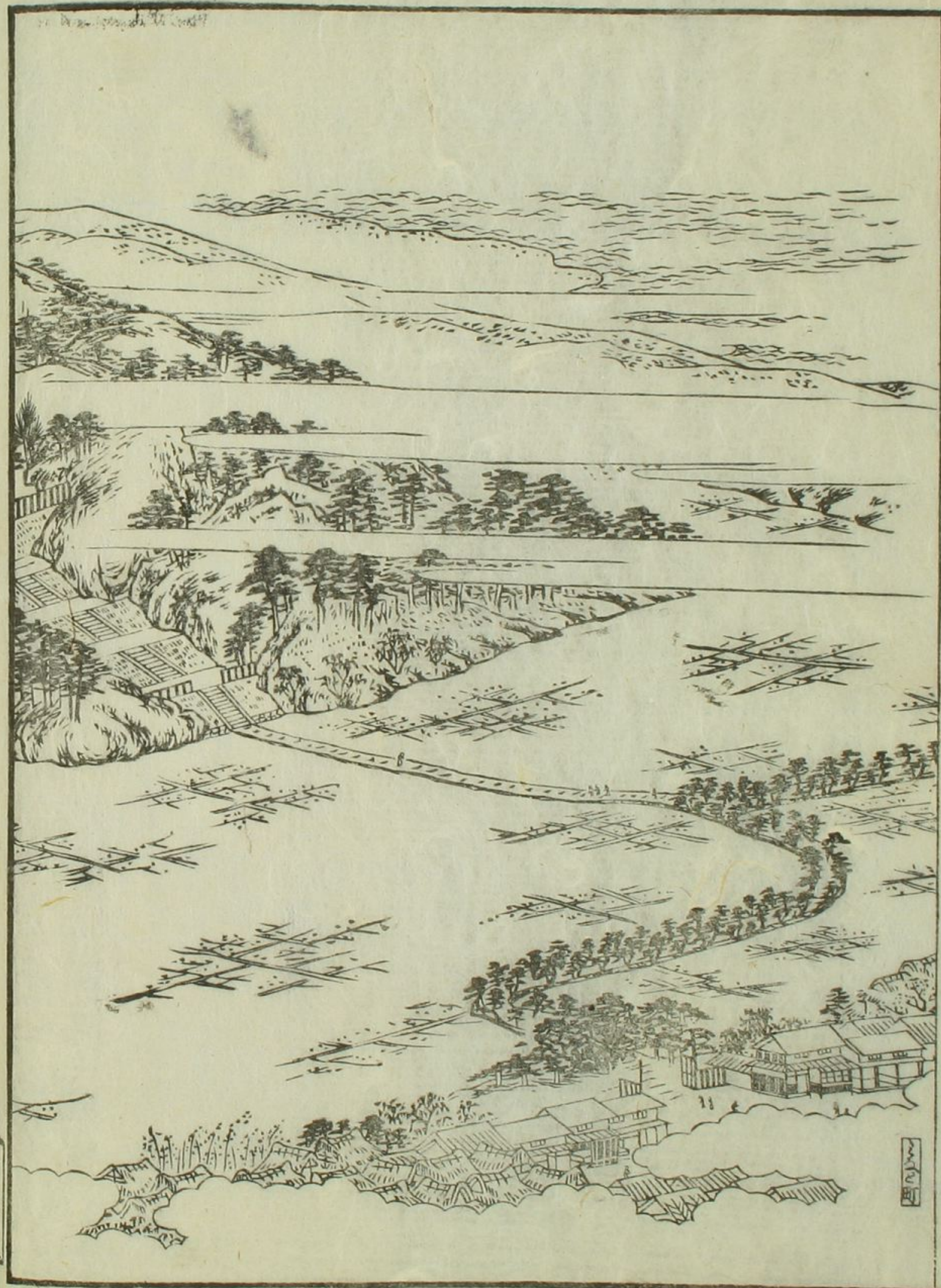
信受し知恩報徳の思ひ湧くは終に正安元年己亥の窮  
冬廿日あまりの以信上人を己が草庵に屈請し昼夜聞法  
の化益を蒙り且朝夕の給仕をぞはしつるふ豈をうしや  
上人即子の正月二日より清心地例るは打伏終に偏に世の  
罽毘塵を抛却し長時の称名専らかりしが忽ち異香室中  
又薫ぐ音樂窓外に空ゆらり二日二夜人の二根と穿らて  
向影はかくて上人は日正知正念にして称名の努め終ると  
大徳せと海し終る丙午六十二歳此は抄して第一回第三回の清法を  
を京師して執事ひ第三十三回正和元年乙未のうし世終る其  
希年應長元年辛未年冬の以竟如上人清齋跡と云ふことせ  
終るの志きりしうし終に関山叢聖の雪と凌ぎ江湖万里の  
氷をまじり遠くうの金澤の草庵に玉趾を寄らる諸方の

門徒を催集るるとたは追福の佛子を嘗終ひそまじりして  
又大綱の基趾に流終ひ即送教の後のため又一座の梵筵  
を設け終るは又懇懇鄭重なりしうしや以上最須教重終る  
甲古彼大綱の民屋日圃白川郡竹黄と云ふありしやは  
大綱に即荒蕪の地となりて今の古石と唱へり叔父信上人の  
送趾願入寺り上人令澤へ移し終る後代に相續恙ありしに第  
八世如慶師の附國中幸礼のうおきて堂舎悉く兵火のぬ  
焼とことこれより大綱と退き出圃へ移りしが日十二世如正  
師の附又日圃之長郡久米村へ移り終る又十五世如高師の  
附又あつて延宝元年の以  
當國の太守のる靈場の日くは衰微を致んるを傷と思ふ  
喜捨の大功德を具し終る即久米より今の宮田村より

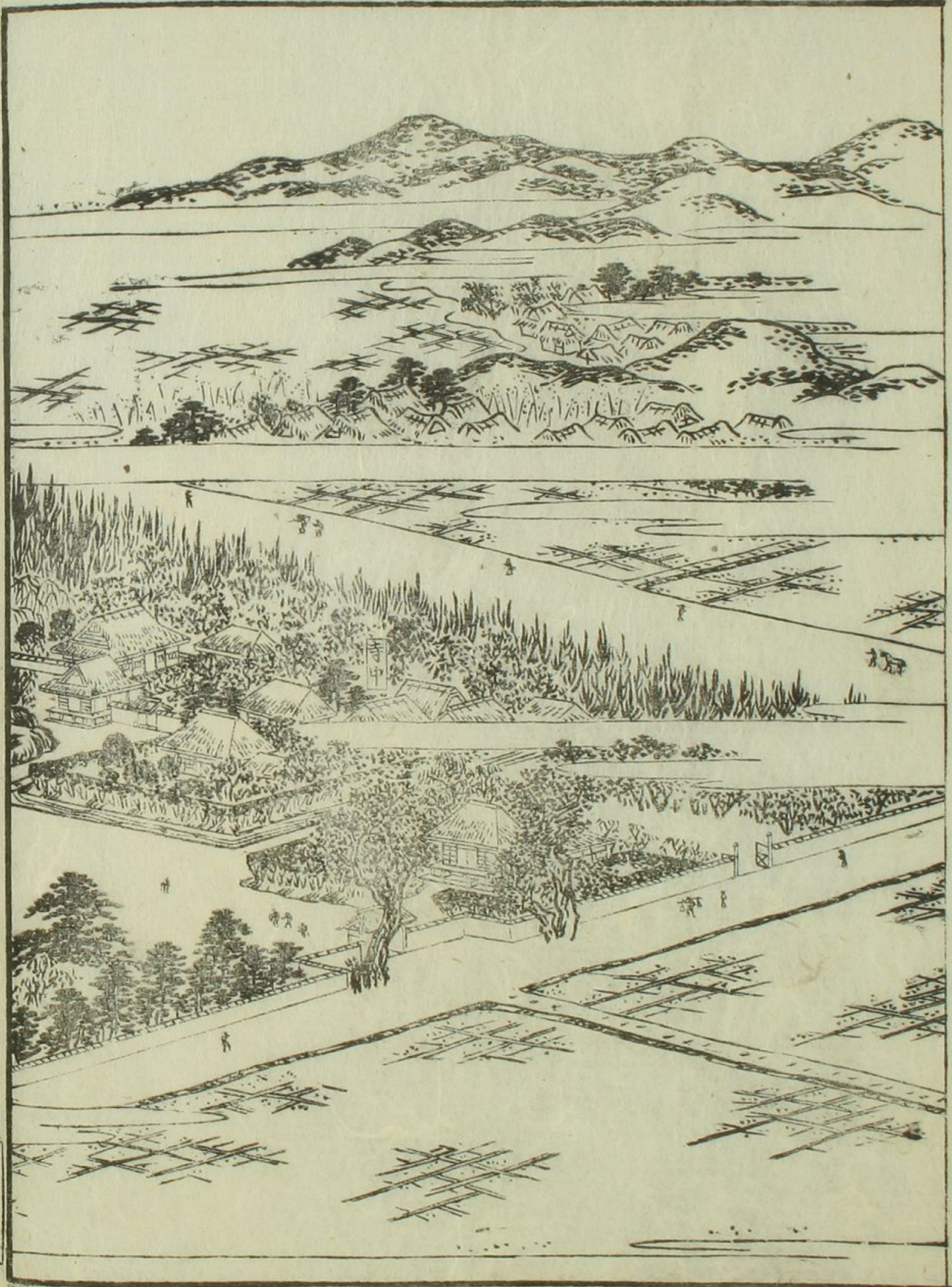
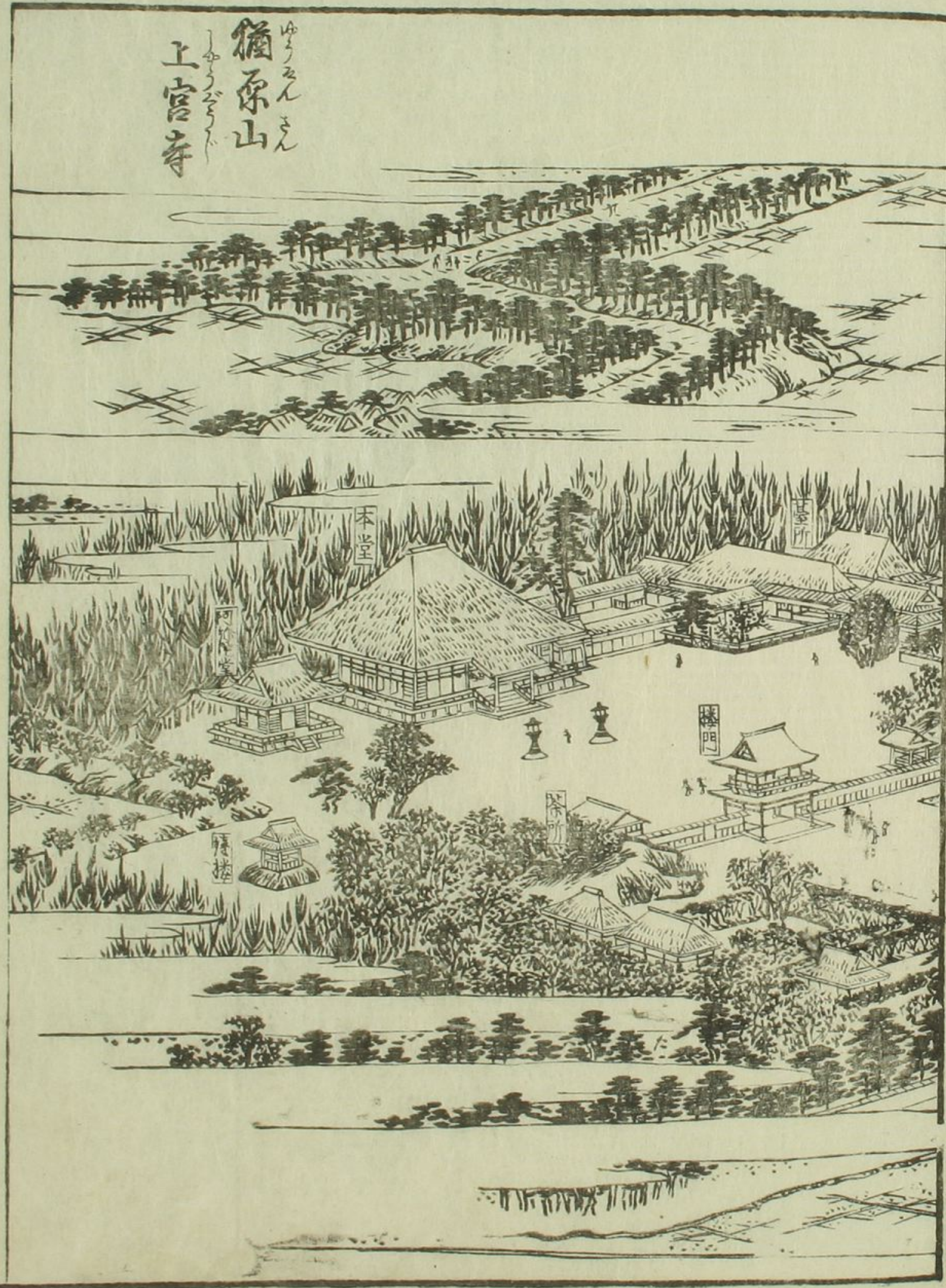
奇院佛圖よりと魏く然して再貞ありせ給ひ系師より  
 御連枝惠明院如晴僧正を法して御位職とあり給ひ寺領  
 三百石外又毎奉奠令二百両香華の資として御寄附あり  
 せ給ひの信上人の御法徳日の再び中とらざりて  
 赤國又曙きくらの滋よるとりて次才之以上送歸編  
 ○靈宝は宗祖聖人御自他雜形の御教聖人御法狀  
 二十に輩牒釋定如所奉之先の御奉願并三世免如上人の御所坊へ御寄附の  
 與正慶元壬申年正月  
 八百餘字釋定如あり  
 ○如信上人の御廟今高保内の金澤ありこれ又  
 國君より坊舎公營築給ひ於田二十石と寄せ給ひとらや  
 ○赤國の名産厚龜の此造の海中より獲はし諸病よめいよとら  
 ありとせん  
 衆宝山淨光寺 西流 日國那河郡中鉾山あり

赤山の二十に輩并二十一番吉田唯佛房の用基之始唯佛房  
 當國茨城郡吉田枝川又一字を造立あり吉田所坊と  
 か中吉田境又給せり然る又用基若美より門と又佛圖  
 を山上へ引り門と遺蹟即山の林蔭あり山下の熱門の龜  
 彈内匠が造他せらるなりと云世に龜内匠をて人の名と心得るなり  
 大和をて給へ給ひ河内の名を蒙りての親なり  
 孫陀如來慈心洛都の地佐竹義重  
 の室これに要安にとらん 宗祖聖人の真教御自他より自照  
 當國茨城の御教  
 僧舎に區あり ○什室御繪傳に卷日幸三都の其一より傳  
 文定如上人後津安法眼之  
 用基唯佛房系圖以上二冊大修復撰の  
 國君より御寄附ありとぞ  
 猶原山上宮寺 西流 日國那河郡末勝あり  
 高祖聖人上皇の御并又二十に輩并十九番猶原明法房の

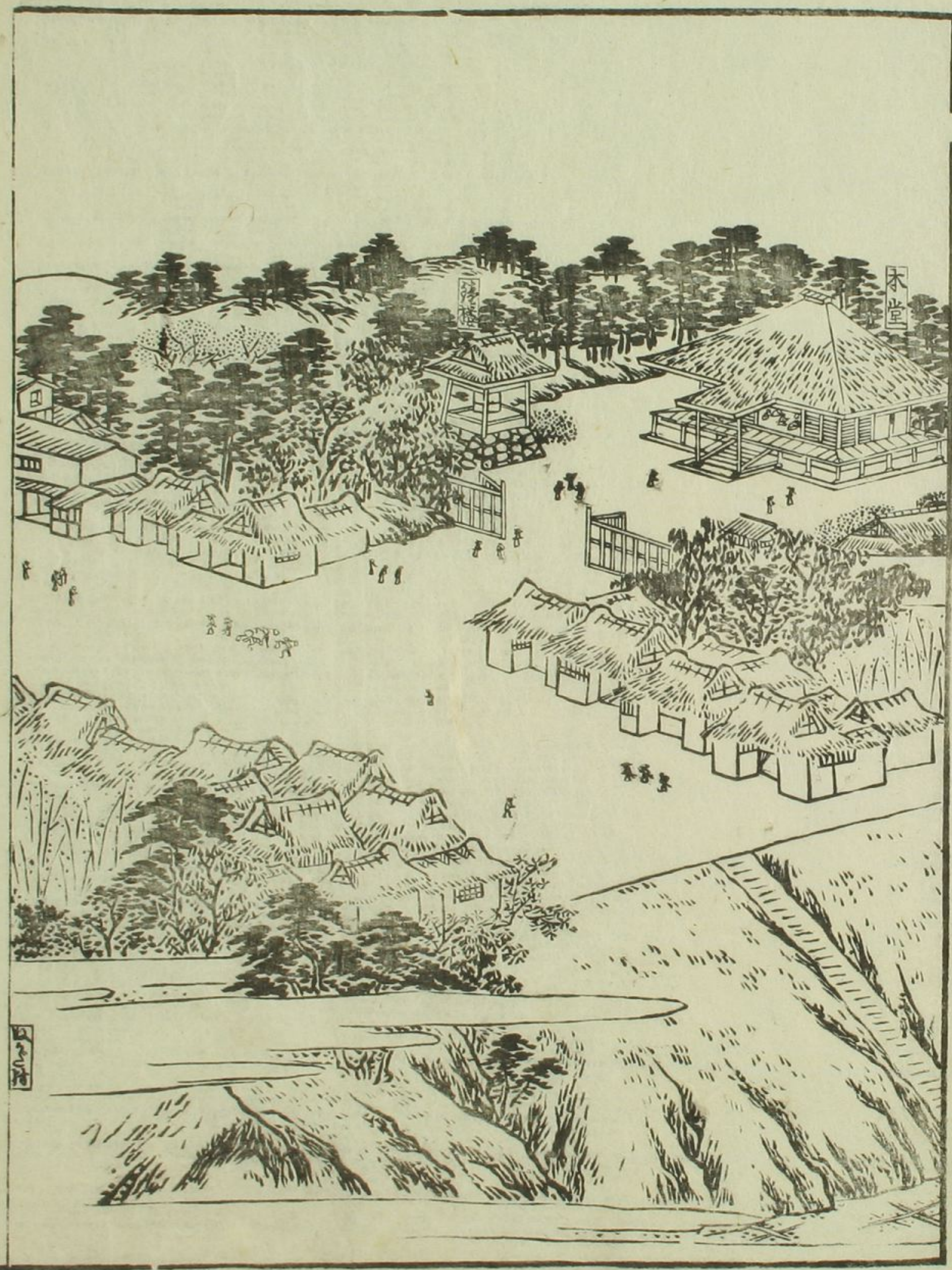
叡宝山  
浄光寺



ゆきんえん  
猶原山  
上宮寺



三十四



三ノ五

小壺山  
阿弥陀寺



阿弥陀と接して  
佛舍利をばら  
圖



**開基** 明法房の俗傳茶の板及山の事やふ出らぬ流ハ  
於此に遺之ありと後年今の於此に後  
**本尊** 阿弥陀如来 聖人の  
佛坊二區あり ○宝物 聖人御澤  
第十字名号 上ノ大經の文に若年の釋文  
其外畧々 左に二枚記法文と記し後ノ  
明法房の像の容貌あり  
自他六十二歳

**小壺山阿弥陀寺** 本流 日國日那  
類田あり

二十に軍第十にの碓出る祖の御足那阿の空信法師の  
開基あり ○本堂八間に面する阿弥陀佛の御像 寺家二區  
定信房 澤がら 寺ハ弱年のむし三井寺又入く聖年の  
難妙を修學し 園嶺一乘の裡又沸く兼て三密瑜伽の法  
と修る一山其右に出る者なく衆侶其智徳と心腹以係  
たる種又定信自思入らく我修得の妙法を以て衆機と化益  
とるるバ惟く我道は宵く者あんやと即志を安く 園東に

て作りしが名智の因縁忽と發託し當國を抄ひて聖人又邂逅くさる  
次て聖道高上の法と説ゆ聖人を誘へんは附て聖人これと耳に入  
然るに唯本願一実迄待不二の要門を立て末世愚癡無智の衆生に  
体念をまて一向一心を弥陀と信しなまは次の生もは佛果を得んこ  
と疑ひはしと易於易妙の法を奉んこそ一切衆生と説んよりし勝  
即得往生のるに唯化力の神法外みずくはと權者微妙の要法と授け  
然りしは定信勝は法我の南を打ち喜喜渴仰の思ひ湧じて終は  
聖人の神門後つたり信心不二の神牙子と名まきりたり

什室 聖徳太子十二歳の尊像 聖人の  
神自他 法苑上人の神親 并  
六字十字の  
名号 昔に聖人  
の所奉 小壺の佛舍利 定信房聖親の地那郡郡大山寺に後聖代を遷て粟村に移り  
至り又今の新田に遷り然もは飯栗村より西をうつりんとて  
の基趾を經管し地所空りたる小塔中に佛の遺物をありて是よりありてこれにきくは終りたり  
すといひゆき承天の二年に法其まよまごころ穿つるやふいと珍奇なる水柱の秘佛舍利とて光明  
耀耀と輝きしは佛智應感の所持なりと持二月  
樹の傍にありて今大山寺と小壺山と云ふ承天の聖蹟と云ふ

大門山枕石寺

東流

日國久慈郡依作の  
新上川合村にあり

或は龍上山大門院と号し二十日輩年十五釋道園坊の遺

蹟なり ○本尊阿彌陀佛 傳教大師  
の所傳

道園法師の江州蒲生郡日野の産なり信姓は日野老道

お監頼秀が後由日野老湯門尉頼秋と云る士方なり當時

不遇はして世をあらきなく思ふ心より自と人の交り跡

く終は流浪して當國久慈郡大門 大門とは三三  
里の地 遍塞

してあるが以て建保五年の秋聖人當國神教化の初

く一日此大門を經回し終は思ひの外は日著て不路徑

遠々れば即老湯門が家に立寄宿りを需め終ひしは老

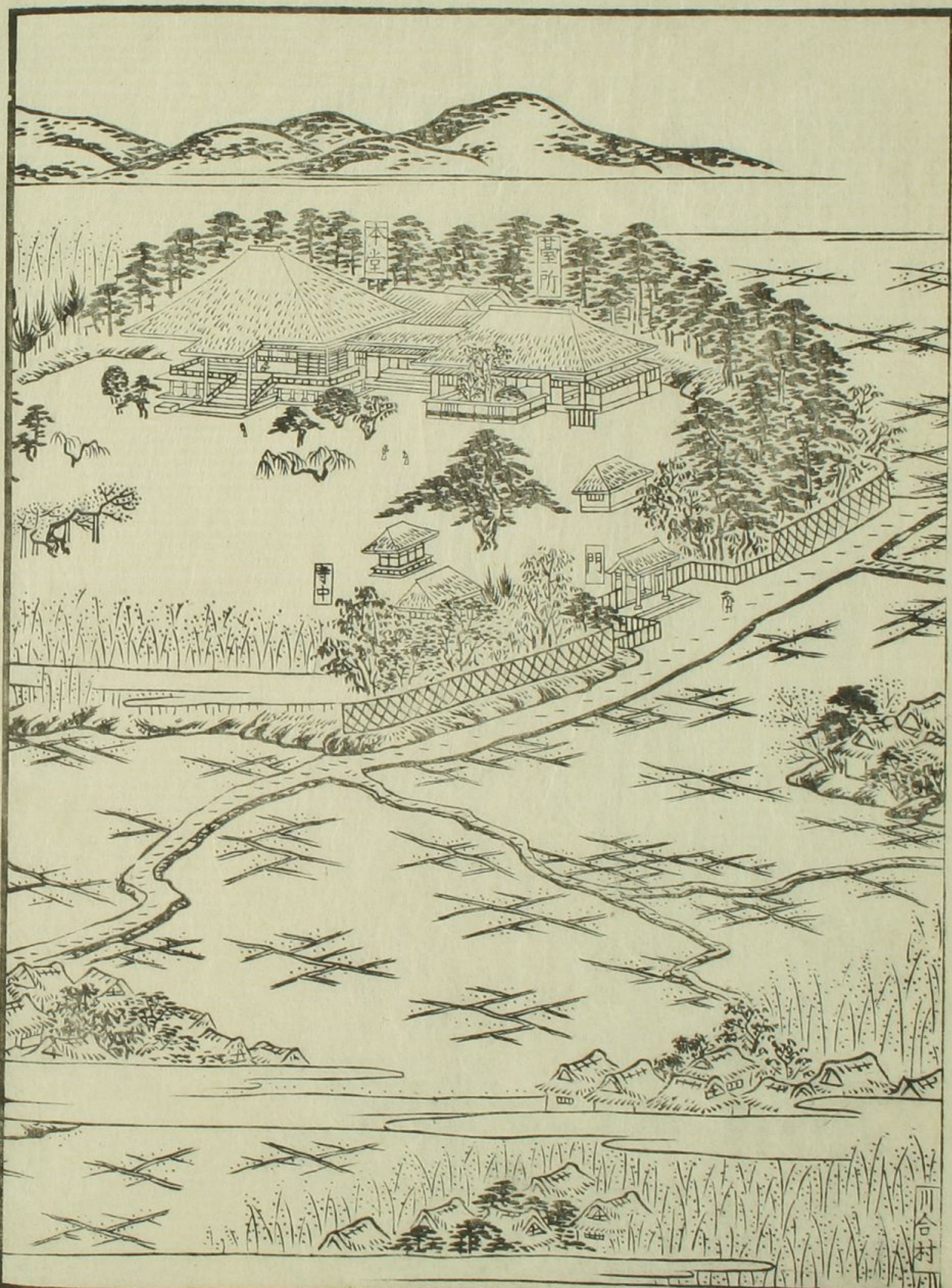
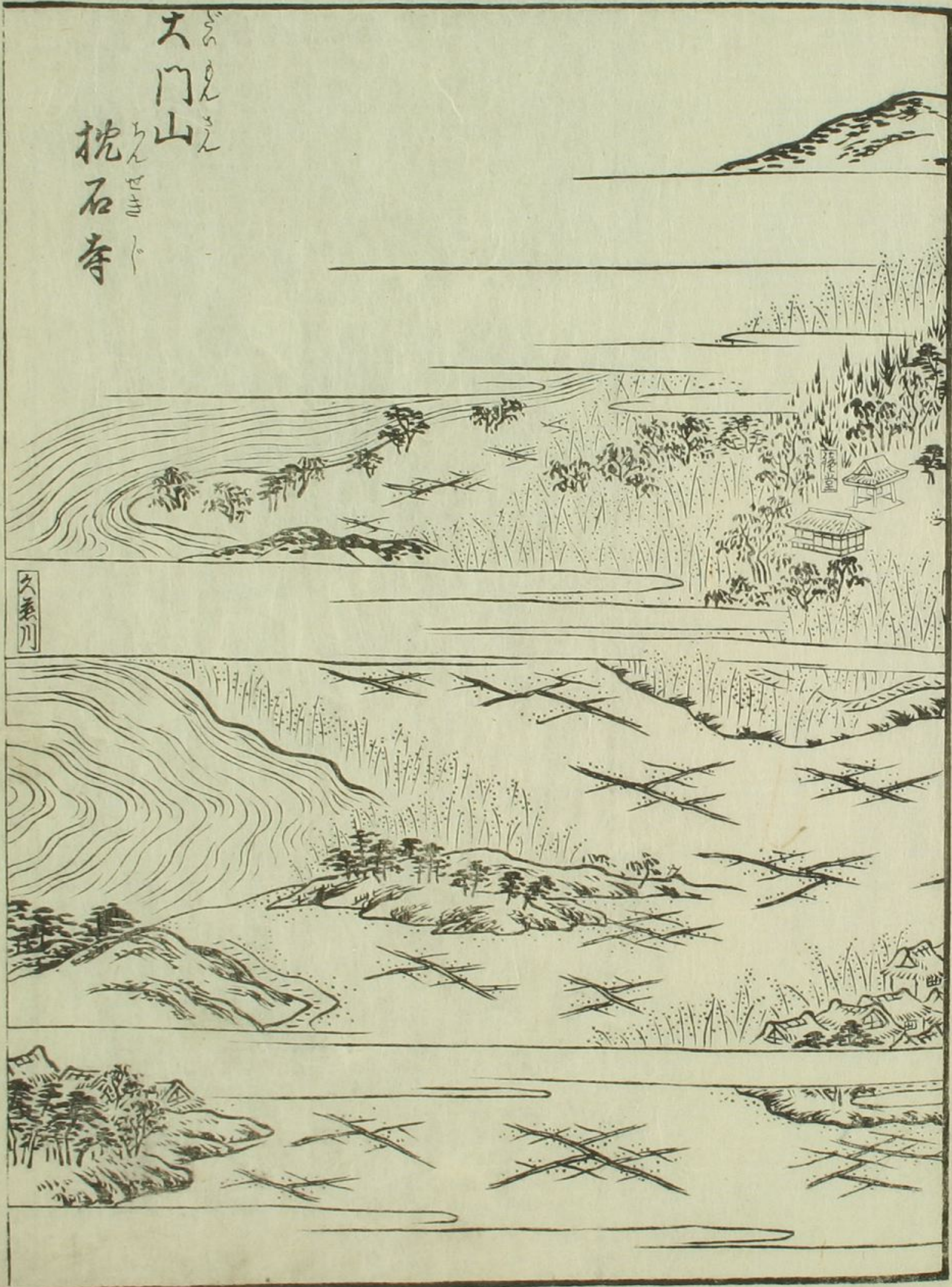
湯門性賢むはけき男を神苑のより我が不任うた多

家るんがいうでう猿人と名とんきとく帰り終ると覺想



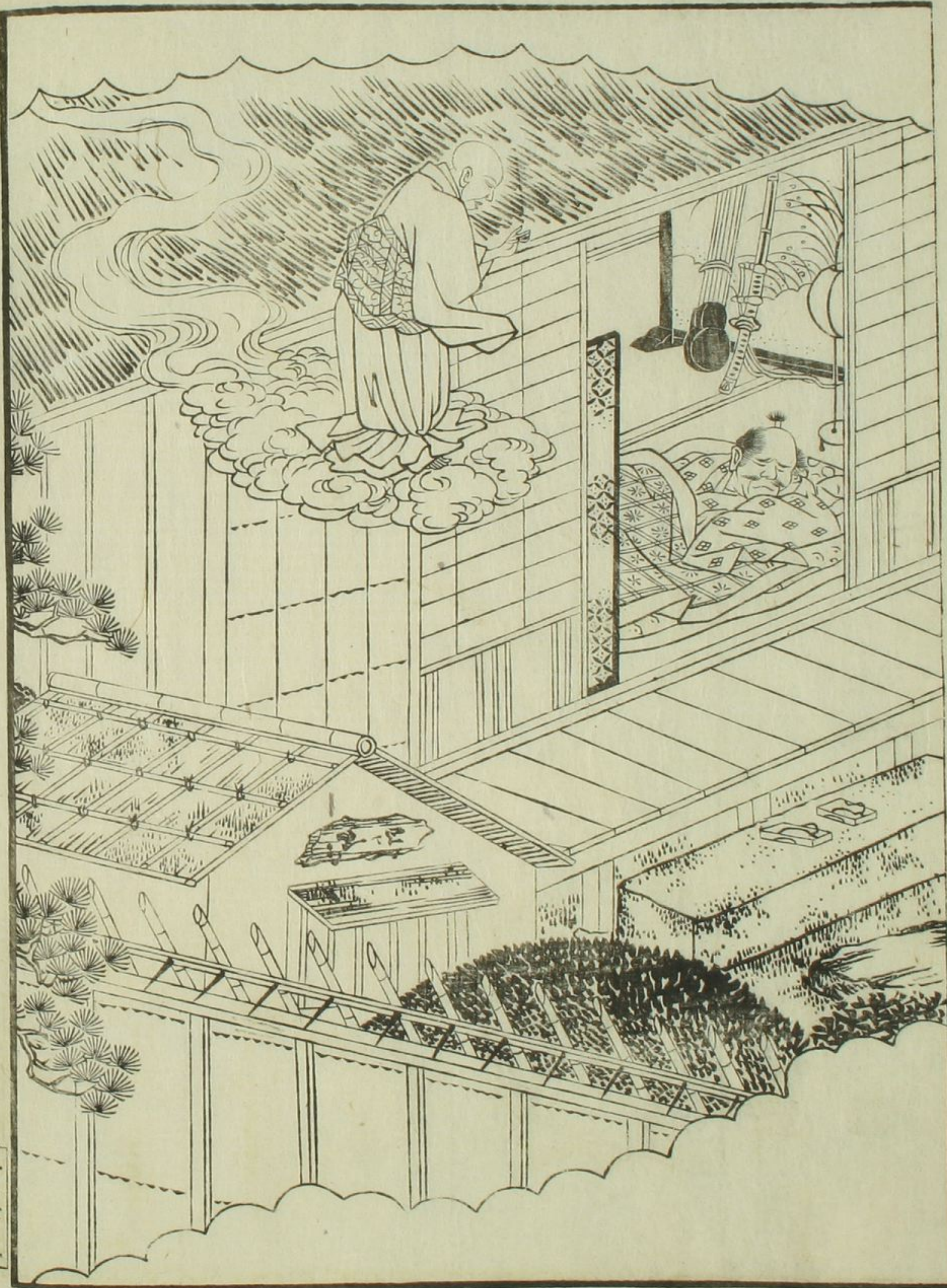
大<sup>たい</sup>門<sup>もん</sup>山<sup>さん</sup>  
枕<sup>まくら</sup>石<sup>いし</sup>寺<sup>てら</sup>

久<sup>く</sup>美<sup>み</sup>川<sup>がわ</sup>



四<sup>し</sup>合<sup>が</sup>村<sup>むら</sup>

ひのよりあまのまじり  
 日蓮秋聖岩  
 又よみて聖人よ  
 帰順を志す  
 志す



かくヤクガガレバもく外に求むべき家居りなれば聖人  
強てこれとせ給ひしうに虎門の外に服はしこころごとく  
去れば法師よりさらばならぬまで先我棒と交べるとか合  
杖を川に投て既よこれを折んとて聖人此杖勢と見給ふより  
矢を手に外面に出給ひしうに月をやく書きてく新先とてし  
見へまうのいれ方うく又まうくせ給ひ芽が新端は露とふせた石と  
むねの枕と疾寒をまひて跡給ふ相送る二三の御弟子此御姿を  
よりも御いたはしとまう方うく涙とこり小御女抱とほし系とせると聖  
人少しも憂給ふけしきうく支那陀因位に御修給ふ肉の山と築血の  
海とまじ焦燥返寒の苦惱を凌ぎ新載永劫身命と惜し給ひがさ  
つ安帯の徳彩を積極し給ふ御眼難をまひらせは今此新端の飯  
履の物の教は元より樹下石上の釈釋氏の教は元より何れも何れも

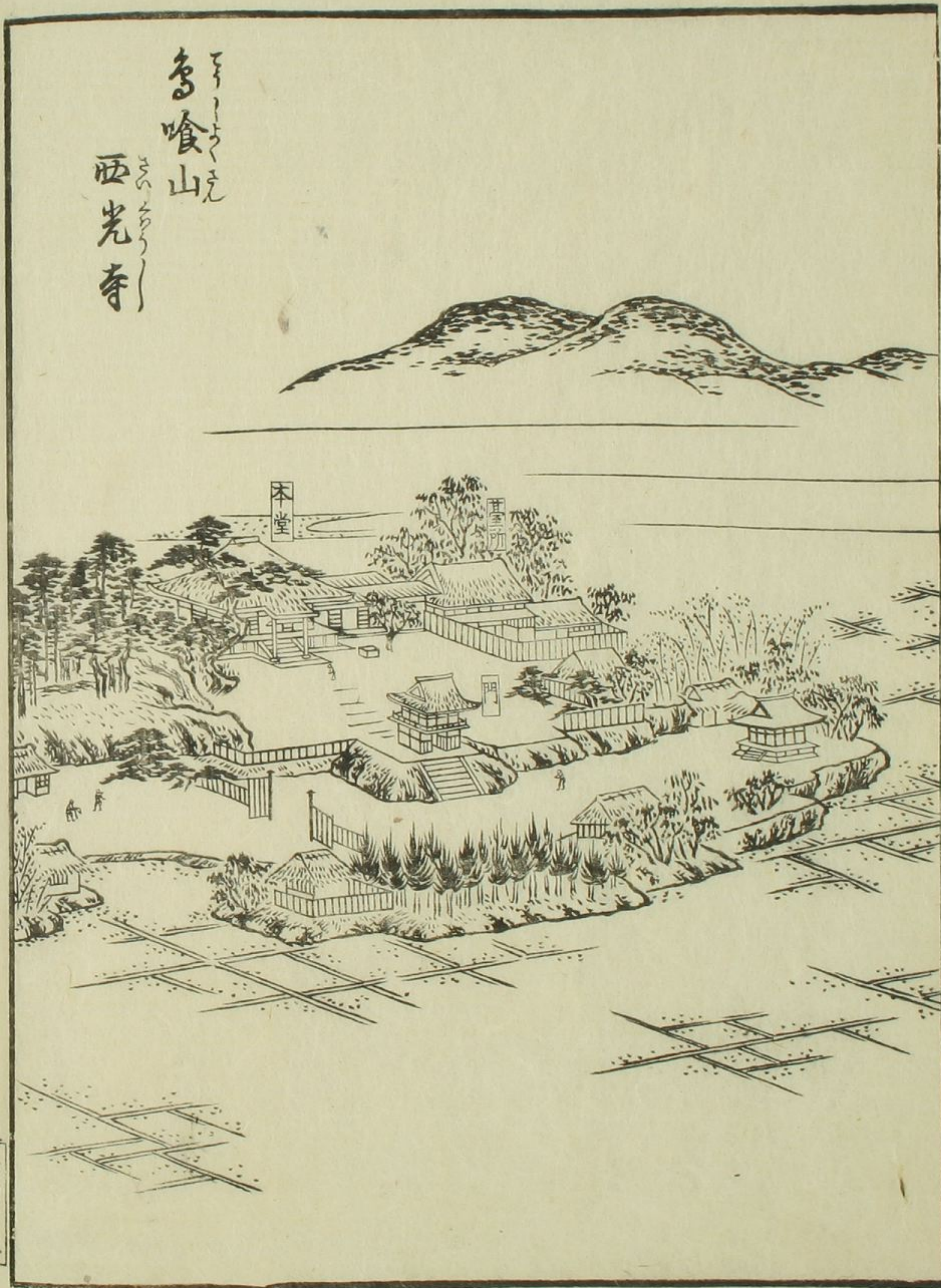
厥人や先よ付ても唯仰ぐべきに弥陀の御恩徳をれば弥陀の御名を  
教ぶると念佛の御教を殊勝と既よ其疾もまう御を虎門を  
花に聖人と退出しなり御をへく体しひるる子の二つをうりこは  
以一人の化佛とよまういふ虎門御名はの何とまはしき花に汝が  
門に来迎はしませし御名こそ則西方の教主是王阿弥陀如来とておま  
しまは勿祈るや百福莊嚴のる像と衆生海度のるよあはれ法  
師の姿と人結縁のうらな塵はまはし給ふや御名は何れけりく云  
難有悲教よりれぬるの恩とよまはし給ふや御名は何れけりく云  
幸は他をうり給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
屈信中系とせ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ給ひ  
世菩薩とて宣ふと見く愛とぬ虎門大と誓き即示現と給ひ給ひ給ひ  
又戸外を何れと恰も日光の再びてててててててててててててててて

其明きもの白晝の如し 在清門心中の弥陀と聖人の所側をく懐ひ  
まふふく熟睡はし終る所息の下よりこそ其光赫然として何ん  
たれば在清門の忽ち大地の身を抛せんびを悔て後まがく我家の法  
系とせ親善居士の所雲と物語り改悔の心をたたりしとく聖人よ  
喜むせ終ひ一樹の蔭一河の流と皆これ終生に縁るれば今又心をく  
まると即終夜陸敷陸敷の大悲をたは撒見機應の若巧をたて地  
力中級の真若凡夫直入の教法をい念にみ再し終ひたれば在清門  
まふに信心發得し速に所弟子の列に後んをを願ひる  
又聖人これを誅して即釋道因と法名を授け終るのり  
より道因房弥を願と信し聖人をる手し終るの地  
終るの安を扱ひく一字を造立し又聖人を誅し終るなり  
たれば心よく入所ならせ終ひ法圓文よまやうかう道因房法

くくろふ中へ聖人神化蓋神幸勞の恩徳須弥もろれと何  
らそりて蒼海に深きを譲りて是といんぞ末世の衆生も  
ふららん然らば物もわづけて其志を後来に残れど如と  
即聖人の願ひなり枕石とて終る寺号とははしりけり  
とらん 後集いさうゆえんみく寺と今の地 ○宝物 枕石 ゆえん 高祖  
神前乃神釈 神前乃神釈 神前乃神釈 神前乃神釈  
頂戴あり 頂戴あり 頂戴あり 頂戴あり  
鳥喰山西光寺 鳥喰山西光寺 鳥喰山西光寺  
無量光院と号し高祖聖人嫡弟二十に輩弟二十にん  
鳥喰唯因法師の芳蹟なり 鳥喰唯因法師の芳蹟なり  
本尊阿弥陀如来 本尊阿弥陀如来

鳥喰唯因法師の芳蹟なり

高喰山  
西光寺



其外什宝畧之

久米願入寺

东流

日圓寺河那久米村あり

高喰山高祖聖人沖孫如信上人嘗て奥州大綱之精舎と菅原  
はしく弘法ありせ給ひしより第十二世如正よりて高不へ將後  
その所の遺跡なり其後十五世如高の代

府君

喜捨の大功德を貞く給ひ高院と宮田巖永よりし

給ひ諸堂魏々たる精舎とはかきりたり

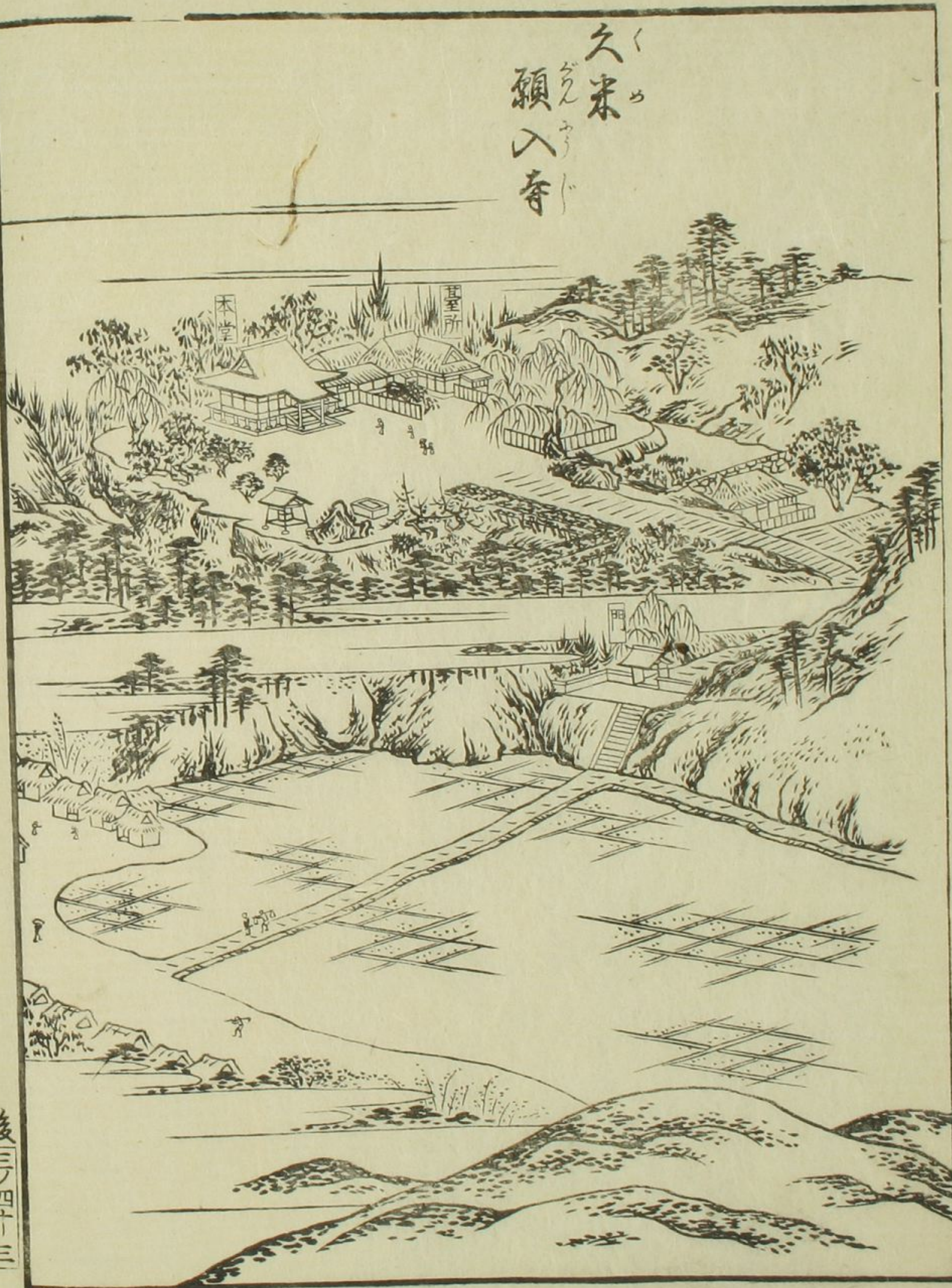
畠谷山覺念寺

东流

日圓郡金澤村あり

二十に輩弟二十三畠谷唯信法師の用基あり  
唯信房と申し四畠園保内小湫畠谷の住人して信姓と畠谷  
次郎信勝と云ふ高祖聖人藤原奥郡沖化蓋の如  
信勝聞法隆喜して終に沖弟子とあり金剛寺二の信者なり

久米  
願入寺



又より此を抄ひて故郷畑谷に一字を記し専ら弘法に  
後世に地を再興せりといふ

○石州淡田永勝寺は唯信房の遺跡なりとぞ傳ふ云亦房高谷  
の地を抄ひて一字を再興あり後総州及び泉州へ移居せしが  
終に於て又移して石州よりなりといふ

大門枕石寺 津太原 日國久慈郡大門村あり

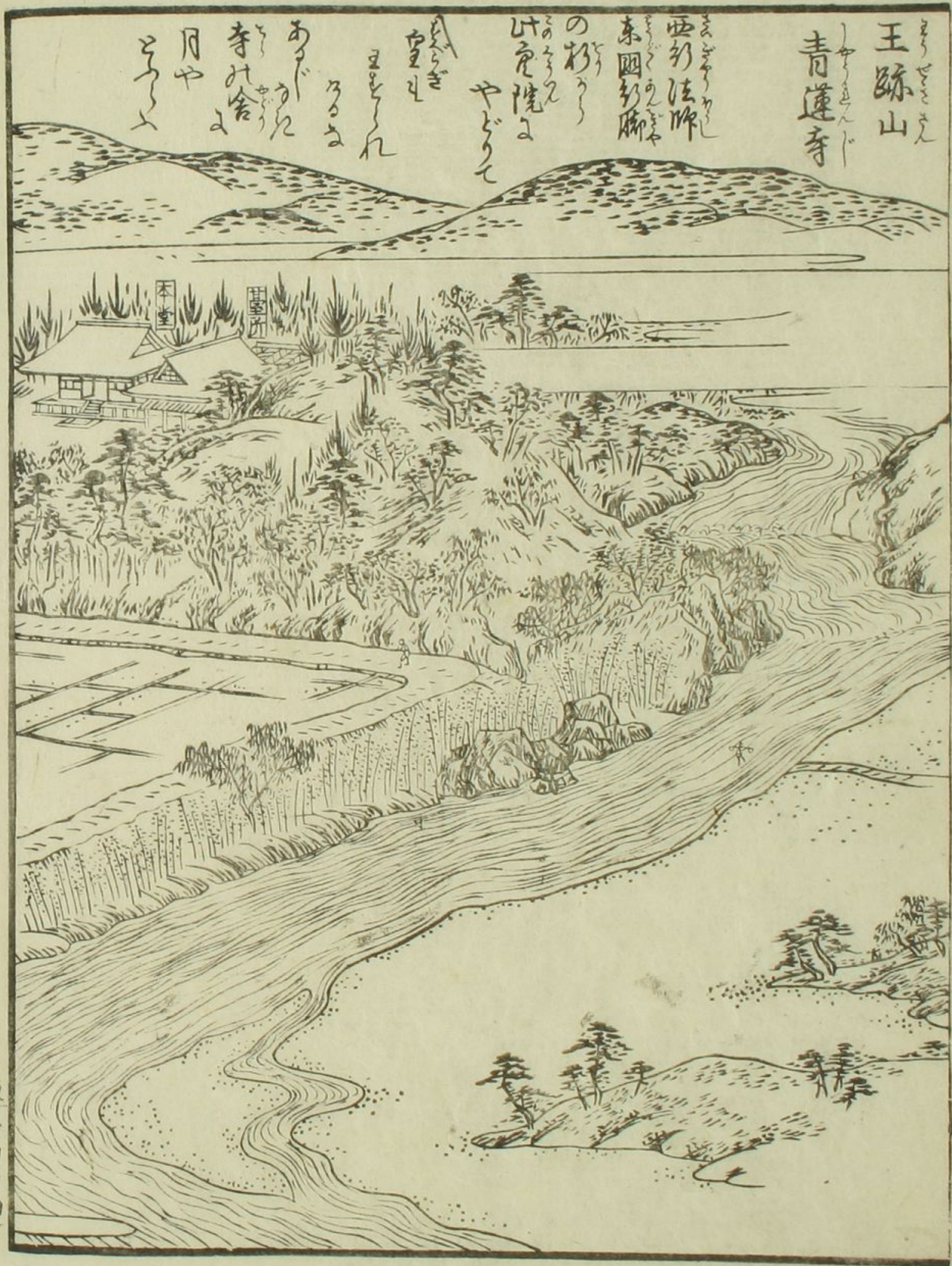
河合枕石寺の舊地なり 尚ほに日持丸浦門入道道園房の  
墓あり 始り日持枕石村の東方の山際を抜のむくまの石塔あり  
其の中は雜草ありてありしが中右証師に百回町忌の記今の石塔に  
いふ

枕石村 日國日都大門の内なり

往昔聖人石を枕し丸浦門と化後終ひて旧地之是に於て終  
に村の名とせりといふ 此村より少しの坂あり其坂の頂に  
といふ日持丸浦門が宅地の跡なりといふ

王跡山青蓮寺 西流 日國日都赤蓮寺村あり

尚院に二十日軍第八物飼證性法師化益の遺跡なり 池田房の  
傳ハ陸奥



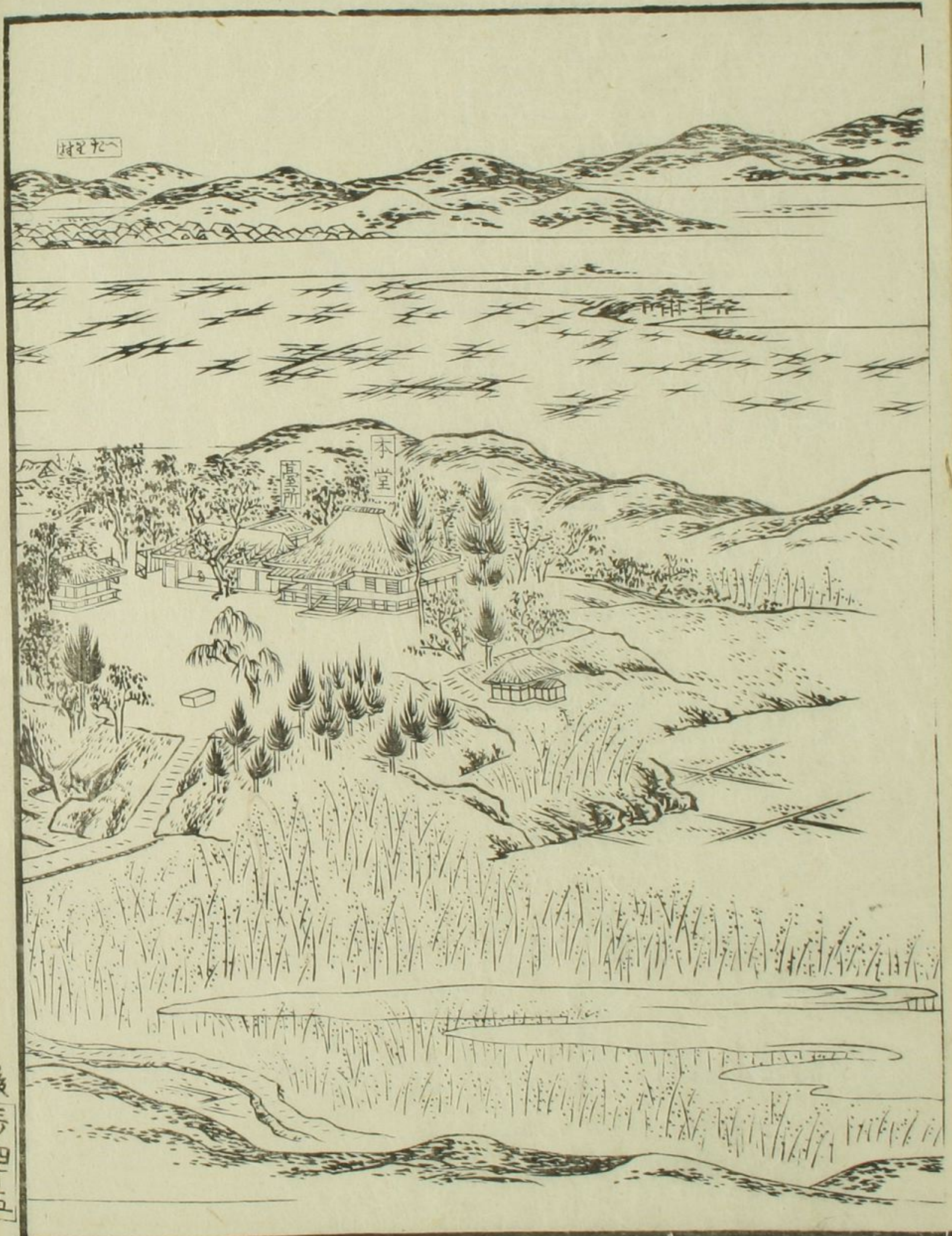
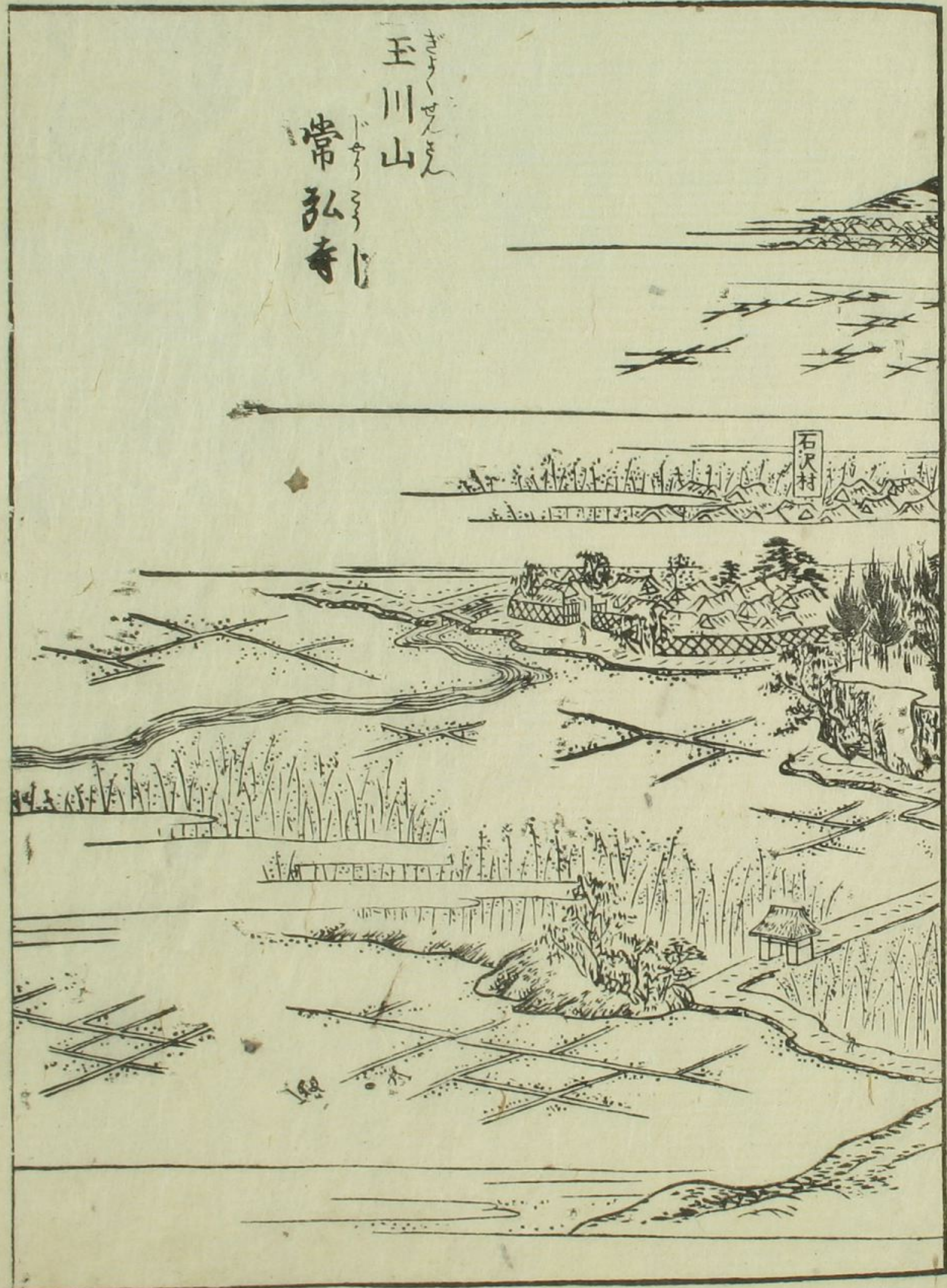
王跡山  
青蓮寺

西の法隆寺  
東の法隆寺

の杉  
けを院  
やぶら

あつた  
寺の舎  
月や  
とらふ

玉川山  
常弘寺





柳倉連生寺

○本尊 弥陀如来

春日の地

往昔何某の親王と云りし止りなき所方此地に隠遁はしくつる其跡より寺と建立して王跡山東蓮寺と号せしと

や然る小宗祖聖人處を所教化の坊に此寺の額廢せり此の即禮性房の命と云と修補せり後

の代此より以て禮性房の寺と号せり後此の即禮性房の寺と号せり後此の即禮性房の寺と号せり後

玉川山常弘寺

西流

日圓那河那石澤村あり

室壽山を子堂と号せり高祖上皇の才子村田慈房の開基之慈房法師二十に輩の内第二十番に祀る

○本尊 阿彌陀如来  
其外 靈宝は聖徳太子の像  
其外 靈宝は聖徳太子の像  
其外 靈宝は聖徳太子の像

院如来

春日の地

其外 靈宝は聖徳太子の像

其外 靈宝は聖徳太子の像

其外 靈宝は聖徳太子の像

其外 靈宝は聖徳太子の像

其外 靈宝は聖徳太子の像

其外 靈宝は聖徳太子の像

其外 靈宝は聖徳太子の像

明法房墓

石沢より廿口を経てある  
小川とまゝに東建村の南に

此の明法房の墓に辨因と云ひて修終者なり一厨の宅地とぞ今尚去境石牆と云の跡あり碑面は猶原明法房墓と記せり

○右墓より西に丁のりし小寺に石法房の像あり上宮を以て明法房の像を安置し寺の三世教正他の明法房の像を安置し

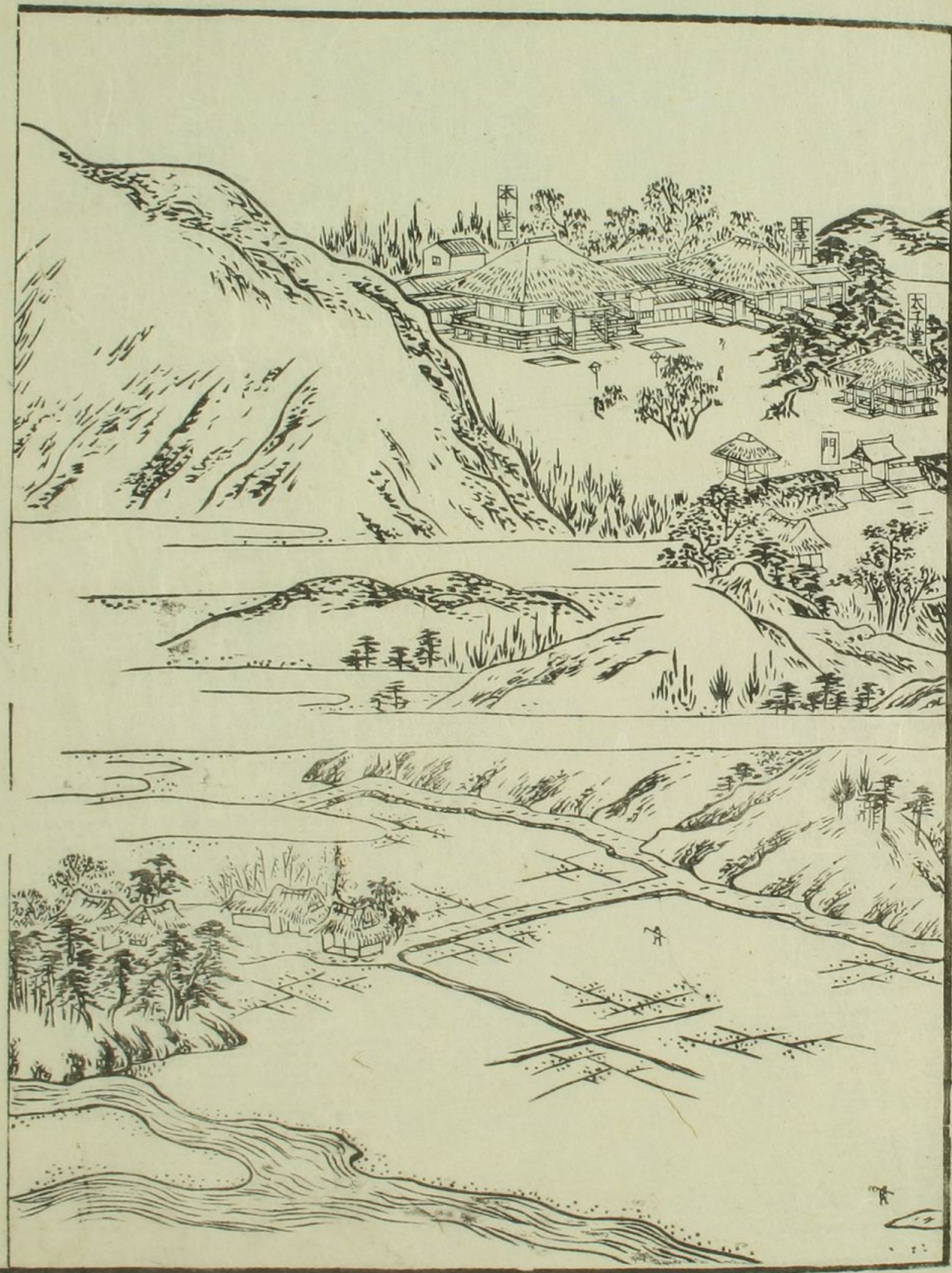
信照山壽命寺

西流

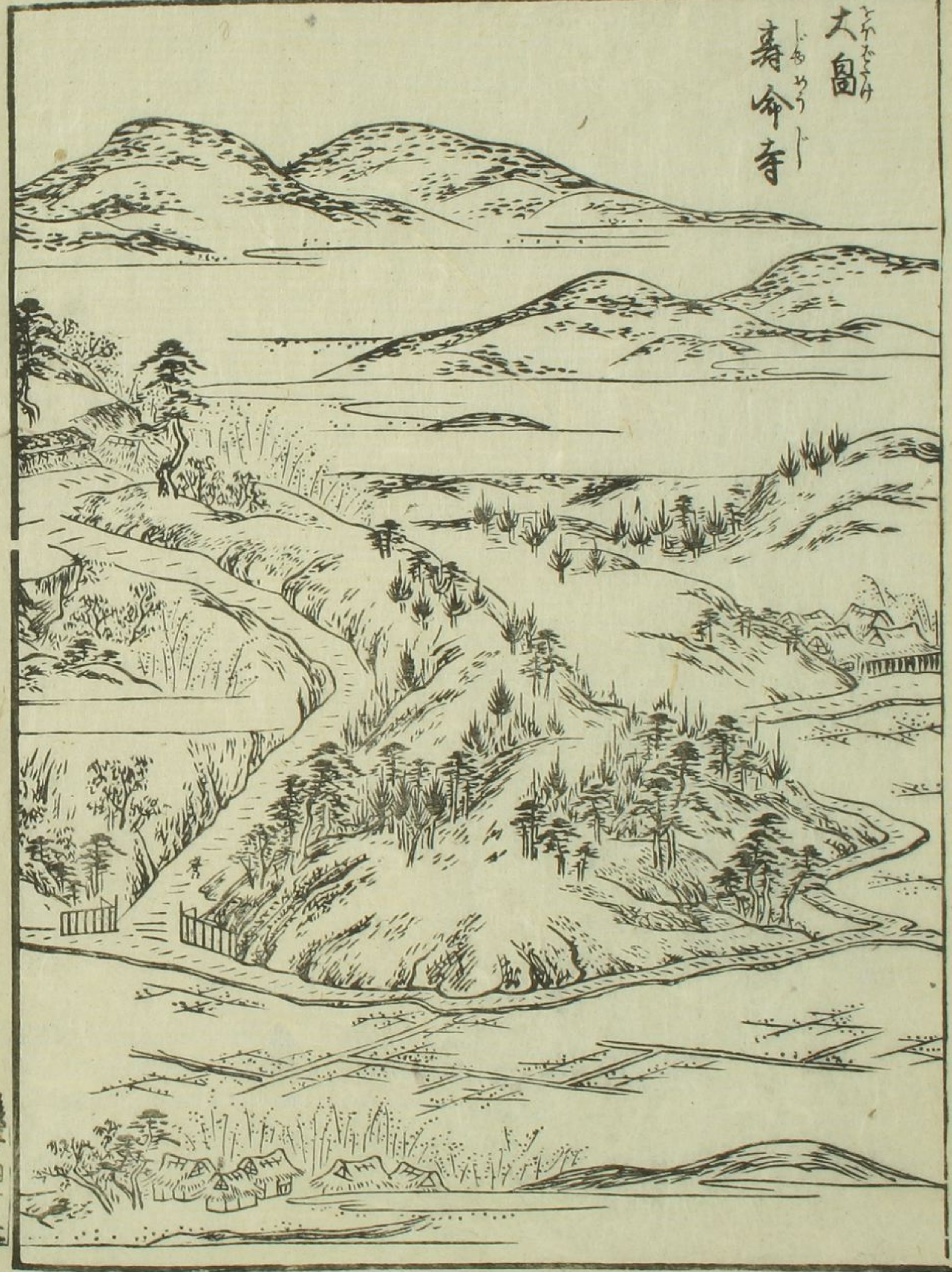
日圓那河那高より

蓮華臺院と号り二十に輩第十六等聖人の神足穴澤入信法師の開基なり○本尊 阿彌陀佛

上宮を以て像を安置せり



大島  
壽命寺



大島 壽命寺

入信後菩提心の因縁をいふと云ふは信姓の清和源氏の苗裔  
喬義景少は嫡孫四郎隆義の息佐竹冠者喬義の長男也  
其身武門に生きたる朝書人向の不定を親ト云ふ世の  
榮利を厭ひ強道の志に切うて完澤と云ふ隠地ニ暮業を  
志つらひ海く菩提の乃公快求一自力の念佛専らはして  
西方の往生とぞ期しうりたる爰ニ宿居於此の附いりて茲  
疾不思議の靈爰あり其根元常ならざる法衣の人忽死と  
して来脱し休西方の往生を求る多々年しうて称名念佛  
息懐はしと云ふも自力の功德いづらふ又億方劫と積も  
其甲斐あらずに去るが信が信心餘念なきをめで今其  
高徳をことせん於急ぎ小徳の星よみて親鸞聖人ニ渴した  
てまつり弥陀の密教を願化力の神勅化を蒙り速に如来の

慈海に浴とど我れこれ西方の候れがゆめく疑ふりさう  
と告法ひ成る天邊に飛入り終ふと見て爰と云ぬ附二建  
條七奉  
入信爰に抄ひく大に歎ひ我奉来の素願満足の時云と  
と急ぎ聖人の禪房に馳靈告のまゝ物語りし伏て教示  
を願ひしは聖人いと快くめでせ給ひ即教化し終り換  
変化力弘願の称名とは自一筋又後世を助らんるまうに  
不謂ふありは助け終らうの佛智の不可思議なれば弥陀の  
本願末代無智の衆生をぞ助け救んとある所らういふおま  
うせ露疑ふ心なく清の難多難修をふりてとて神助の一足  
程は活定と一向一心は信にまうり外に別の細はかく  
信に系し世にその教附の称名懈怠なく寢ても寤ても  
唱へば唱へるゐるの称名をれば幾も万唱も佛恩教附の

るし心得あり是ぞ誠ニ化カ本願の念佛なりといひ念ぶるは  
神勅化何れせ給ひしう入信忽ら其意と發得し後法執喜  
斜るべきある法はし乃九丈心や是まで自カをたのむつるの  
抑らうことよゆ大若知誠ニ植遇はしなれば今度の一大りの  
遂ほじきふ何れ難あやとく聖人と三拜し神身子の列真  
らんを願ひしうは聖人も其志の厚きよ免じ終り神契給  
はしませし入信神信心堅固にして日夜朝暮のまうらう  
佛恩報謝の称名をこそ喜ぶれり時又貞應元年春二月  
聖人の命よふ川で尚寺と開闢し専ら化カ本願の奥を  
弘通ありしが建長三年三月二十又日不思議の大往生をぞ  
遂らさるり  
ハ信持あり先は後し次は神は後持し  
燃ふ大島と不退格の基礎を用くとも  
あはれ悔しむ四び ○室物六字名号畫  
像の弥陀 聖六字の肖像を共ニ聖人の真像なり

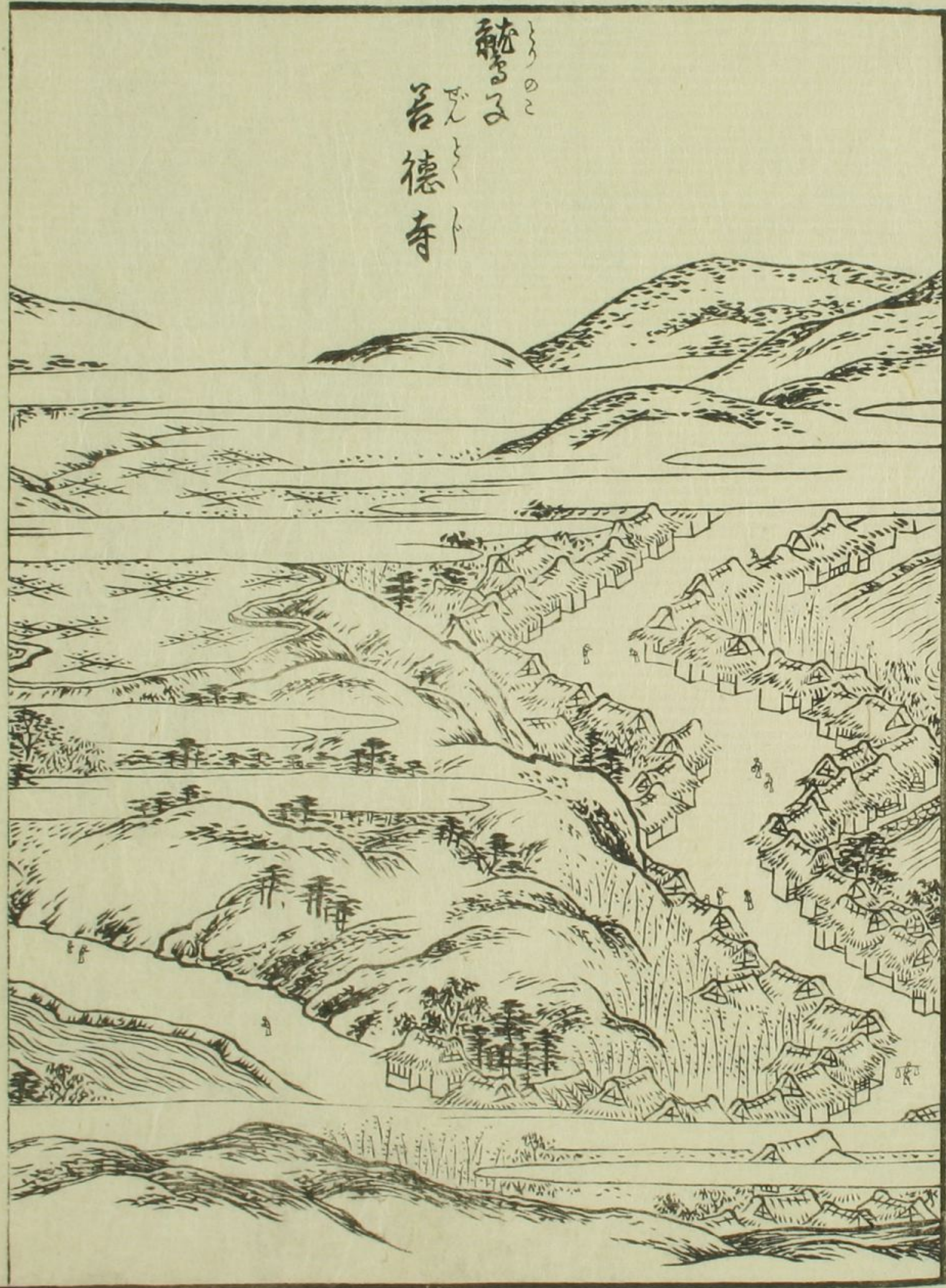
○壽命寺ハ中津川のやうりし船場邊に此石より水戸の邊と九十里  
をくつりたるれは此邊神田路まをれば舟と牽ふるに於て  
あはれ悔しむ四び  
額光山若德寺 西流 月卅日那摩子村あり

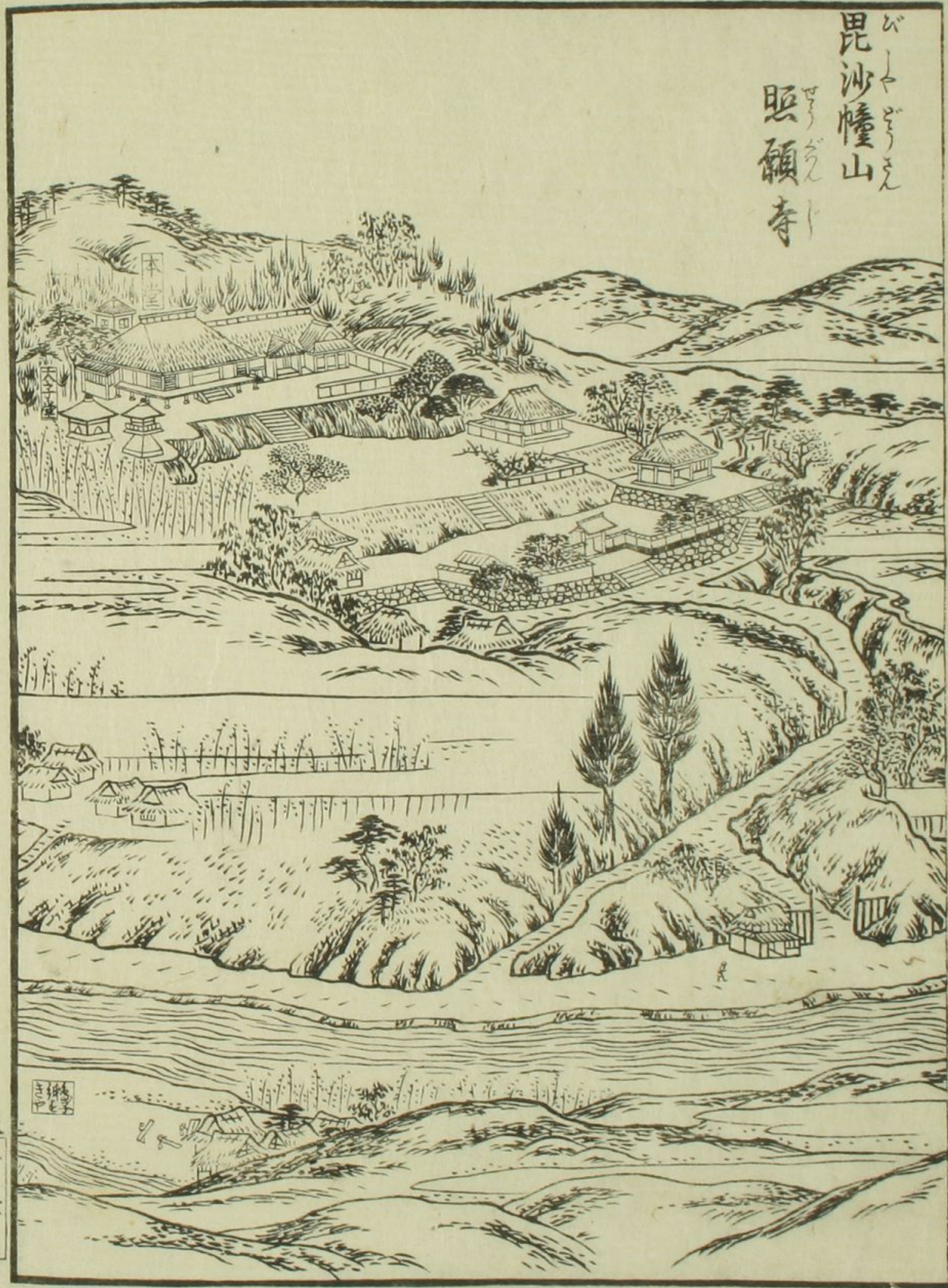
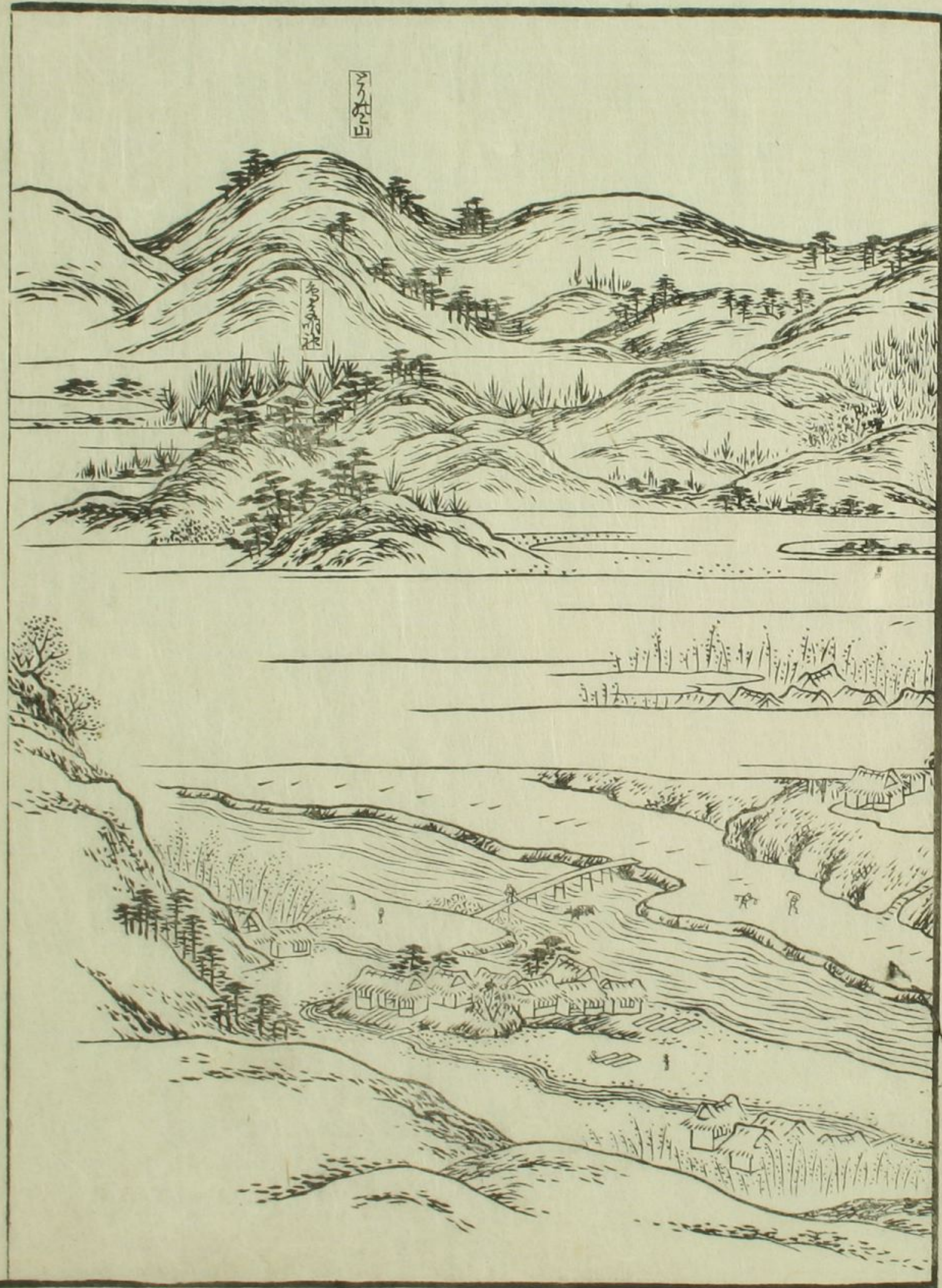
尚寺ハ二十に輩第十二の正尚久慈若念房の遺跡にして水戸  
坂戸若徳寺月系あり ○本尊安阿弥の他 高祖聖人神  
真像畫像の弥陀十字名号等を安座せり

毘沙壇山照願寺 東流 右月石あり

用基ハ二十に輩第十七番奥那念信大徳とぞせえり  
○本堂九間ニ面奉る弥陀佛 春に  
他  
念信房旧俗の芳姓ハ源氏にして清和天皇に世の孫多田満仲  
に代ハ後裔傳像守教義乃三男新羅三郎義光の二男光長  
より三葉教氏ハはに男高澤傳守氏信これ方り代ハ弓矢

徳寺  
徳寺





金沢  
願入寺



の家方るが就中氏信の性稟驍勇にして膂力人々絶く智謀  
 兼備の武人なりしと宿縁のなせりや当國福岡の房舎に於  
 て聖人の遺訓を専修専念の法を徳聞し忽ち化力  
 奉願の慈海に悟入し淨土の真門を發得ん是より依て眞應  
 元年承永く火宅の門を去り遠く菩提の室にのり法名  
 念信と賜り所承の列に加りしうは即鬼沙幢村に一字と  
 記し照願寺と号し専ら化力念佛の法流と遠近に弘通せ  
 り終に寛元三乙巳年三月十六日寂を示しと云  
上人の遺訓は山に居てありしが聖人の所承なり思沙幢村に一字と管業せしより是より  
 後して後世に於て其の修業する所の地とおぼしめてあるを又老まると及びて其の若  
 衆を懐くもつゝ別を建てて照願寺と改名せしめてかくの如く三代信長の時より  
 多分の城郭と毀れて無場と成り思沙幢村より寺院と引合はしむるより今又退却せしむる

○什宝 二河白道の文  
聖人の所承奥の六字名号  
 河内名号多十歳とあり 浄信傳記卷  
兼業古法眼  
 の画勝法輪云

國君 上り 莊嚴の所承附ありせりと其後構えんこと

○然るに山にお對して山王権現をまつところの山あり絶嶮より四方に徳  
 心は隣國の山川日月も其を委して其風系も奇絶なり兼業と  
 ありて甚自にたり此石即常陸下野の國境なり

兼濟山慈願寺 東流 下野國上野郡那烏山兼業あり

兼業野山慈願寺 西流 日州日那馬改武郡那烏あり

左子堂願入寺 東流 常陸國久慈郡上金澤あり

当院に如信上人の所廟あり  
是即所承兼業法師の遺跡なり  
 上人所承の地を委く兼業願入寺に記す

岩船願入寺の所持不役寺二區あり ○什物上宮を子所  
 自他にる像 國君 如信上人の所報 野寺殿 あり

○銀杏の大樹 上人所承の傍  
あり兼業中津

親鸞聖人 御舊蹟 二十四輩巡拜圖會後編卷之三終



